令和元年度　全国中学生・高校生防災会議

全国防災ジュニアリーダー育成合宿

記録集

東北会場

令和元年８月17日（土）～19日（月）
主管　宮城県多賀城高等学校
　　国立花山青少年自然の家

熊本会場

令和元年11月15日（金）～17日（日）
主管　熊本県立熊本第二高等学校
　　国立阿蘇青少年交流の家

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

目　次

ページ

◆ はじめに …… 1
◆ 令和元年度全国中学生・高校生防災会議「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」概要 …… 2
〈東北会場企画〉
◆ 東北会場実施要項 …… 3
◆ 東北活動レポート …… 4
・被災地案内「まち歩き」　宮城県多賀城高等学校　生徒会 …… 4
・ワークショップ①「アイスブレイク」　国立花山青少年自然の家 事業推進係　田村 徹平 …… 5
・県内活動事例の紹介「シロツメクサの約束」
第32回感動作文コンクール文部科学大臣賞受賞　加藤 麻友 氏 …… 5
・ワークショップ②「多賀城高校オリジナルDIG」　宮城県多賀城高等学校　生徒 …… 6
・基調講演（p4c）「協働で取り組む防災ジュニアリーダー活動」
宮城教育大学 学長特別補佐 特任教授　野澤 令照 氏 …… 7
・地学巡検「沢活動」
富山大学大学院（元 栗駒山麓ジオパーク専門員・栗駒山麓ジオサポーター）　原田 拓也 氏 …… 8
・アクションプランづくりと発表「全国・世界の、未来の高校生に伝えること」
宮城県多賀城高等学校　原田 実 先生 …… 10
・各班のアクションプラン「全国・世界の、未来の高校生に伝えること」 …… 11
・ジオパーク見学　宮城県築館高等学校　生徒　　駒の湯温泉　菅原 昭夫 氏 …… 14
◆ 感想文集（東北）　～合宿の感想や今後の取組について～ …… 16
◆ 東北参加生徒一覧 …… 26
〈熊本会場企画〉
◆ 熊本会場実施要項 …… 27
◆ 熊本活動レポート …… 28
・阿蘇火山博物館の見学　館長　池辺 伸一郎 氏　学芸員　豊村 克則 氏 …… 28
・立野被災地見学（立野ダム、高野台）　熊本大学 特任准教授　鳥井 真之 氏 …… 29
・復興弁当とおばちゃんの話　すがるの里　渡辺 ヒロ子 氏 …… 30
・交流タイム　ポスターセッション　熊本県立第二高等学校　高崎 真鶴 氏 …… 31
・各校作成ポスター …… 32
・講話　熊本地震から学ぶ自然災害との付き合い方　熊本大学　特任准教授　鳥井 真之 氏 …… 37
・講演　災害…浮かび上がる暮らしの課題～熊本地震と現代社会～
熊本日日新聞社編集委員兼論説委員　小多　崇 氏 …… 38
・被災地体験・語り継ぐ活動　阿蘇ジオパークガイド　広瀬 顕美 氏　　阿蘇の灯　代表　辻　琴音 氏 …… 39
・防災講演　未来につなげ！熊本地震の教訓～リーダーとなるみなさんへ、未来に向けてのメッセージ～
熊本県危機管理　防災特別顧問　有浦　隆 氏 …… 40
・ワークショップ①　災害と向き合う　神戸学院大学 非常勤講師　諏訪 清二 氏 …… 41
・ワークショップ②　災間を生きる君たちへ～避難所運営と子どもの力～
東北大学 非常勤講師　齋藤 幸男 氏 …… 42
・ワークショップ　全体発表会　熊本県立熊本第二高等学校　高崎 真鶴 氏 …… 43
・熊本城見学　熊本大学名誉教授　山尾 敏孝 氏 …… 44
◆ 感想文集（熊本）　～合宿の感想や今後の取組について～ …… 45
◆ 熊本参加生徒一覧 …… 58
◆ おわりに …… 59

はじめに

平成23年に発生した東日本大震災はもとより、平成28年の熊本地震、近年では、昨年度の大阪府北部地震、北海道胆振東部地震、各地の豪雨災害、そして、本年度の度重なる台風被害など我が国は場所を問わず自然災害が起こりやすい特性を有しています。このような自然災害に対応するために、過去の災害から得られた教訓を踏まえ、地域において防災・減災対策に取り組んでいく必要があります。

本事業は、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることを契機に、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震や火山噴火、水害などが頻発している我が国における災害やその対策等の現状を世界にアピールするともに、次代を担う人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指し、これからの防災・減災の担い手である中学生・高校生を中心とした防災会議を４年計画で開催し、防災ジュニアリーダーを育成することを目的としています。

昨年度は、阪神淡路大震災のあった兵庫県で実施し、今年度は８月に東北、そして11月に熊本で実施いたしました。次年度は東京を会場に実施する予定です。

今年度の事業については、東北会場の企画においては、平成28年に災害科学科が設置された宮城県多賀城高等学校と国立花山青少年自然の家、熊本会場の企画においては、平成28年の熊本地震で大きな被害にあった熊本県立第二高等学校と国立阿蘇青少年交流の家が連携・協力し、これまでの防災に関する取組の成果を活かし、企画・運営を行いました。

全国から２会場合わせて166名の中学生・高校生等が集まり、被災地でのフィールドワークや、防災に関する様々な講義やワークショップ、各学校へ帰って実行するためのアクションプランの作成・発表に取り組みました。各学校において、この会議で学んだことを活かした活動に取り組むことで、防災・減災の取組が全国へ広がるとともに、各地域において防災・減災を担う防災ジュニアリーダーが育っていくことを期待しています。

最後に、本事業の実施に当たり、公益財団法人上廣倫理財団を初め、関係機関・団体の皆様に多大なるご支援ご協力いただきましたことに、深く御礼を申し上げます。

令和２年３月
国立青少年教育振興機構理事長　　鈴木　みゆき

令和元年度全国中学生・高校生防災会議
全国防災ジュニアリーダー育成合宿

概　要

目　的

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることを契機に、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震や火山噴火、水害などが頻発している我が国における災害やその対策等の現状を世界にアピールするともに、次代を担う人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指し、これからの防災・減災の担い手である中学生・高校生を中心とした防災会議を４年計画で開催する。

2018年度は兵庫、2019年度は東北・熊本を会場として実施し、2020年のオリンピック・パラリンピックイヤーでは、東京を会場として、さらなる取組の広がりを目指す予定である。

主　催　独立行政法人 国立青少年教育振興機構

特別協力　公益財団法人 上廣倫理財団

対　象　全国の防災教育や被災地支援活動に積極的に取り組んでいる中学生・高校生

東北会場企画

主　管　宮城県多賀城高等学校、国立花山青少年自然の家

日　時　2019年８月17日（土）～８月19日（月）

場　所　宮城県多賀城高等学校、国立花山青少年自然の家　他

後　援　復興庁、宮城県教育委員会

参加者　91名（中学生５名、高校生59名、教員27名）

熊本会場企画

主　管　熊本県立第二高等学校、国立阿蘇青少年交流の家

日　時　2019年11月15日（金）～11月17日（日）
※熊本県外参加者は11月14日（木）から

場　所　国立阿蘇青少年交流の家　他

後　援　熊本県、阿蘇市、益城町、南阿蘇村、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、益城町教育委員会

参加者　75名（中学生９名、高校生41名、教員25名）

東北会場企画

令和元年度　全国中学生・高校生防災会議
「全国防災ジュニアリーダー育成合宿 東北」実施要項

❶ 日　程：令和元年８月17日（土）～８月19日（月）　２泊３日
❷ 会　場：宮城県多賀城高等学校、国立花山青少年自然の家、栗駒山麓ジオパークビジターセンター
❸ 主　催：独立行政法人　国立青少年教育振興機構
❹ 主　管：宮城県多賀城高等学校、国立花山青少年自然の家
❺ 協　力：栗駒山麓ジオパーク推進協議会
❻ 特別協力：公益財団法人　上廣倫理財団
❼ 後　援：復興庁、宮城県教育委員会
❽ 参加者：91名（中学生５名、高校生59名、教員27名）
❾ 参加校：17校

宮城県内（５校）　・宮城県石巻西高等学校　・宮城県築館高等学校　・宮城県多賀城高等学校
・多賀城市立東豊中学校　・気仙沼市立階上中学校

宮城県外（12校）　・北海道厚真高等学校　・北海道奥尻高等学校　・岩手県立宮古工業高等学校
・釜石市立釜石東中学校　・秋田県立秋田北鷹高等学校
・福島県立小高産業技術高等学校　・千葉県立館山総合高等学校
・学校法人成城学校成城高等学校　・東京都立大崎高等学校
・新潟県立糸魚川白嶺高等学校　・兵庫県立舞子高等学校
・熊本県立熊本第二高等学校

❿ 内　容：

	13:00	14:00	15:00-16:30	16:30-18:00		20:00	21:00
8月17日(土)	仙台駅東口集合 （貸切バス）	Ⅰ 開講式 オリエンテーション ・学校紹介 ・「まち歩き」説明 （多賀城高校）	Ⅱ 被災地案内 「まち歩き」 （多賀城市内）	移動	入所・入室 夕食 （国立花山青少年自然の家）	Ⅲ アイスブレイク	入浴・就寝

	6:30-8:30	9:00-10:30	10:30-12:30	12:30	13:30-16:50	17:30	19:00-21:00	
8月18日(日)	起床朝食	Ⅳ ワークショップ 小田隆史 宮城教育大学准教授 多賀城高生 スタッフ	Ⅴ 基調講演 野澤令照 宮城教育大学 学長特別補佐 特任教授	昼食	Ⅵ 地学巡検沢活動 （沢下流部）	夕食	Ⅷ ポスターセッション 多賀城高生 スタッフ	入浴・就寝

	6:30-8:00	9:00-11:30	11:30-12:00	12:40	13:20
8月19日(月)	起床朝食	Ⅶ ジオパーク見学 Ａ荒砥沢～駒の湯 Ｂ駒の湯～荒砥沢 →ビジターセンター 築館高生スタッフ	Ⅷ 閉講式 （栗駒山麓ジオパークビジターセンター）	昼食弁当	解散 くりこま高原駅

被災地案内「まち歩き」

講　　師

宮城県多賀城高等学校　**生徒会**

執筆担当者

北海道厚真高等学校　**蓮池 柚奈、山口 海梨**

◆ 活動内容

今回の全国防災ジュニアリーダー育成合宿では初日に宮城県多賀城市に行き、多賀城高校生徒会の皆さんから説明を受けながら多賀城市内のまち歩きをしました。まち歩きでは最初、東日本大震災の津波によって被災したイオンモールに行きました。イオンモールの近くには海があり、そこから津波が押し寄せて来たそうです。１階階段前の壁に津波の最高到達点が記されていました。階段を上り、避難していた人が居た立体駐車場で、当時の津波の映像を見せていただきました。

次に多賀城市内を歩き回りました。町中の電柱には、その場所ごとに津波が来た時の最高到達点が示されていたため、各場所でどのくらいの高さの津波が来たのかが一目でわかるようになっていました。海から離れるにつれて、津波の高さは低くなっていったことが分かりました。まち歩きの最後は多賀城駅に行きました。多賀城駅に行くと、東日本大震災による津波の最高到達点の高さで作られた大きなオブジェがあり、オブジェの説明を受け、まち歩きは終了しました。

執筆担当者

熊本県立熊本第二高等学校　**長濱 勇気、稲留 慎之佑**

◆ 感じたこと／学んだこと

今回私たちは、「まち歩き」に参加して、東日本大震災のリアルかつ生々しい被災状況を再確認することができました。その中でも特に印象に残ったことは、多賀城高校生の行動力です。震災が起こってつらい中自分たちが何をすればその経験を後世に伝えられるか考え、津波標識や、「まち歩き」MAPといった形で、実際に活動していたのでとても感心しました。また、私たちは取り残された生徒たちが雪の降る中、八幡歩道橋で一晩を過ごしたという話を聞きました。もし自分たちがその場にいたとしたら、家族とも離れ離れで、何が起きているか分からず、とても不安で怖いだろうと思いました。今回の「まち歩き」で私たちは、行動することと、伝えていくことの大切さを学ぶことが出来ました。多賀城高校の生徒の皆さんは、暗い過去を全国の高校生たちに伝えてくれました。私たちは、この行動力を手本として、11月に開催される西日本ジュニアリーダー合宿に活かしていきたいと思います。

ワークショップ①

「アイスブレイク」

講　　師

国立花山青少年自然の家 事業推進係　**田村 徹平**

執筆担当者

北海道奥尻高等学校　**木元 さくら、白戸　琳、宮本 卓弥**

◆ 活動内容

アイスブレイクは、初対面の相手と交流し、心の壁を取り払うために行いました。まずは曜日ごとに人を決め、５人の生徒と自己紹介を行い、名前・学校・趣味・合宿で学びたいことをはじめとして、それぞれ好きなことを聞き合ってお互いを知りました。次に、自己紹介をした５人目を参加者全員の前で他己紹介しました。全員で円になり一人ずつ発表し、自己紹介で話せなかった人についても知ることができました。

◆ 感じたこと／学んだこと

自己紹介をした人とはその後も話す機会が多く、最初の交流がとても大事だと身をもって感じました。曜日ごとに５人探すという活動をして、自分から積極的に話しかけることが大切だと思いました。また、他己紹介という形で他人を紹介するためには相手の話をよく聞き理解する必要があるので、質問をしながら聞くという力が大切だと実感しました。これを活かして９月に行われる津波サミットでは、他校生に積極的に話しかけ、交流したいです。

県内活動事例の紹介
「シロツメクサの約束」

講　　師

第32回感動作文コンクール文部科学大臣賞受賞　**加藤 麻友** 氏

執筆担当者

新潟県立糸魚川白嶺高等学校　**清水 綾乃、古市 朱莉**

◆ 要旨

2011年３月11日に起きた東日本大震災によって当時小学４年生だった加藤麻友さんが幼い頃からの大切な友人を失ってしまいました。そして、大きくなった自分がその友人のために何ができるのかを考えて、当時のことをたくさんの人に知ってもらうために、思いを綴った作文を書きました。また、作文の内容に合わせた絵も添えられて紙芝居も作っていました。当時のことを風化させてはいけないとおっしゃっていました。

◆ 感じたこと／学んだこと

私は東日本大震災について、動画やニュースで聞いたことしかありませんでした。実際に震災を体験した人から聞くのは初めてでしたが、作文を聞かせていただき紙芝居を見せていただくと、とても恐ろしいという気持ちや不安な気持ちがあふれてきました。改めて震災・津波の恐ろしさや恐怖を感じました。この活動は震災で起きたことを風化させないためにも、とても意味があり、大切なものだと思いました。

ワークショップ②

「多賀城高校オリジナルDIG」

講　　師　宮城県多賀城高等学校　**生徒**

助言・講評　宮城教育大学 准教授　**小田 隆史** 氏

執筆担当者

秋田県立秋田北鷹高等学校　**関根 基己**

◆ 活動内容

DIGと は、Disaster Imagination Gameの 名の通り、災害をシミュレーションしたゲームである。災害発生時から避難完了までの過程を、地理的要因、建物条件などを考慮しながら、途中で起こるトラブル・ハプニングをクリアし、避難するゲームである。今回のDIGは、多賀城高校生が考案したオリジナルのDIGとなっていた。多賀城生がファシリテーターとなり、他のグループ全員が避難者として避難について検討しながら進めていった。始めに地図等諸条件を全員で確認し、避難を開始した。まずは避難先の選定からで、建物によって階、築年数、備蓄の有無なども異なるため、重視するものでグループ内の意見が分かれる事が多かった。避難先の決定後も、避難途中で運が悪いと、厳しいトラブルが重なり時間がかかってしまい、避難完了がギリギリのグループ。一方では、トラブル等を強行突破するグループも見られ、それぞれの個性が見られた。最後に講師の小田先生より講評をいただいた。

執筆担当者

東京都立大崎高等学校　**古屋 敦健**

◆ 感じたこと／学んだこと

このWSで学んだことは、避難意識についてです。DIGで使用した地図は、ハザードマップのようでもありました。地図上には、避難できる場所がいくつかありますが、それぞれ避難にあたって条件があり、どこが一番よいかグループで決めるのは大変でした。また、避難場所へ移動する途中で、いくつかのトラブルが発生するよう設定されており、グループで対応を考えることもしました。特に難しいと思ったトラブルは､避難途中で外国人に出会うトラブルでした。

言葉では十分に伝えられないので、ジェスチャーを交え伝えるなど、グループで考えました。実際に遭遇したときには、このように対応すればよいのだ、というヒントを得ました。

DIGでは、河川の氾濫や壁の倒壊など、実際に起こりそうなシチュエーションを想定し、避難場所や避難経路、トラブルへの対応について考えました。DIGを通して避難意識を向上させるとともに、危機管理意識を高めることができました。学んだことを今後に生かしていきたいと思います。

基調講演（p4c）

「協働で取り組む防災ジュニアリーダー活動」

講　　師

宮城教育大学 学長特別補佐 特任教授　**野澤 令照** 氏

執筆担当者

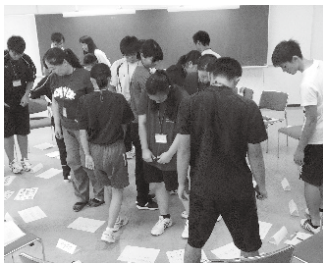
岩手県立宮古工業高等学校　**大久保 颯、佐々木 駿**

◆ 要旨

「防災活動には答えがない」「考え続けることが、防災ジュニアリーダーとして大切。そして、伝えることも大切」との野澤先生からの言葉を投げかけられ、防災・減災への考え方、防災ジュニアリーダーとして身につけるべき力は何かを深く考える機会となった。

今回は、p4c（探究の対話）の手法を用いて安心して対話を行い、探究心や思考力向上を高めることとした。今回、p4cを用いた活動として次の内容を行った。まず、p4cの大切なルールとして「なにを話しても笑われない、批判されない、否定されない」「コミュニティボールを持つ人だけが話せる」を参加者全員で確認をした。

その後、コミュニティボールを作成しながら自己紹介を行い、「防災」をテーマとした問いを各グループで考え、問いに対しての考えを深めた。問いは、明確な答えがないものを考え、グループで話し合いどの問いについて話し合うかを決めた。あるグループでは、「人の安全と環境のどちらを優先すべき？」、また他のグループでは「避難訓練は必要か？」の問いが出され、個々の考えや地域の課題について話し合いを行い、意見や考えの共有がされた。



執筆担当者

学校法人成城学校成城高等学校　**米倉 心之介、小林 大晟**

◆ 感じたこと／学んだこと

私たちが今回の基調講演を通して感じたこと及び学んだことは大きく分けて３つある。

まず、１つ目は議論することの面白さだ。自分の意見を相手に伝えたり、他者の意見と比べたり、それに対して他者がどう思うかを知れたりすることは、私たちの中でとても良い刺激になったと感じている。

２つ目は積極性の大切さだ。先述した議論の面白さは私たちが自ら挙手をして自分の意見を積極的に発さなければ、感じることが出来ないものであっただろう。また、意見を積極的に伝えることで議論が展開しより面白くなっていくのを私たちは実感した。

３つ目はリスペクトの重要性だ。話の中で相手を否定しないという文言を強調して言う場面がいくつかあり、実際議論の中でも相手を否定しないことで私たちも意見が言いやすくなっていたと考えた。

以上３つのことを私たちはあの短時間で知ることが出来た。とても濃厚な時間の過ごし方が出来たと私たちは感じている。

地学巡検「沢活動」

講　　師

富山大学大学院（元 栗駒山麓ジオパーク専門員・栗駒山麓ジオサポーター）
原田 拓也 氏

執筆担当者

福島県立小高産業技術高等学校　**福山 大騎**

◆ 活動内容

【沢の様子】

沢内で移動では、水の量はいつもより少なかったらしいのですが、水が早く流れていて、とても冷たく、水の底が見えるほど綺麗な様子でした。

沢の周りを観察すると、礫岩や自然の粘土、砂岩が凝縮したもの、水の力によって運ばれてきたとても大きな岩など、自然が働く力を肌で感じることができました。

【滝の発見と飛込み体験活動】

沢を歩き続け、奥深くにある小規模ながら勢いの強い滝を見ることができました。また誘導係の先生のご指導の下、３メートル程ある高さから水の溜まり場にダイブするという体験をさせていただきました。

写真では伝わりにくいですが実物の滝はとても迫力があり自然が作り出したとは思えないくらい壮大なものでした。

【沢の岩石の違い】

沢を調べながら歩いていると、泥岩と呼ばれる材質が柔らかいものと、材質が硬い玄武岩と呼ばれるものとを見ることができました。

これらの性質から、同じ沢内でも、地形が変動した所とは見た目や質量だけでなく材質までも違うことがわかりました。

また、硬い石などによって削られてできた「たこつぼ」という穴が多数見られ、地形が変わる要因は単純なようで奥が深いものでした。

【まとめ：沢活動を経験して】

沢活動を通して沢を観察すると、岩や地形によって、いつ、そこで何が起きていたのか、仮説を立てることができます。また、それを踏まえた上で、これからどのような自然災害に対しての防災対策が必要になってくるか、防災ジュニアリーダーとなる私たちにとっては、とても良い経験となりました。

執筆担当者
千葉県立館山総合高等学校　**伊藤 礼奈、宇井　愛**

◆ 感じたこと／学んだこと

沢活動で、まず目に入ったのは大きな岩です。８～10tの岩が点々と落ちていて、すべて水の力で運ばれてきたことにとても驚き、土砂災害や河川の氾濫などの自然災害の威力を感じました。柔らかい砂岩は硬い石に削られ独特の模様が自然の力で作られ美しさがありました。自然にできた蛸壺は生物の住処になっていることに面白さも感じました。また水晶を含んだ石はきらきらと光っていて、金槌で叩くと火花をあげました。一番驚いたことは、地震による断層の威力で砂岩が溶かされ油粘土のような材質に変化していたことです。地殻変動の摩擦は大きな熱を発生させて土壌の風合いを変化させることを学びました。

美しい景観を楽しみましたが、地滑りが起きてもおかしくない土壌というガイドにその土地の性質を知ることの大切さに気づきました。班のメンバーと声を掛け合い楽しみながら沢活動で地質の学びを得ることができました。

執筆担当者
多賀城市立東豊中学校　**及川 颯太、佐々木 俊輔**

◆ 感じたこと／学んだこと

私たちは、今回の沢登りを通して３つの災害について学びました。３つの災害とは、崖崩れ、地すべり、土石流です。この中でも一番気をつけるべき災害は土石流で、沢登り中に地震が起きたら、崖や岩から離れ、速やかに沢から上がることが大切だということが分かりました。また、沢登り中は、ちょっとした岩の傾斜や不安定な岩を歩いてバランスを崩したり、倒木でスリップしたりすることで、いつもよりも疲れやすくなることを感じました。疲れてくると、危ないことに対する注意力が散漫になるので、みんなで声を掛け合ったりすることが大切だと感じました。

今回の沢登りでは、自然の中で、沢を歩くのはとても気持ちよいけれど、危険も伴っていることも改めて感じることができました。今回学んだ知識を無駄にしないようにどんな時にも危険があることを意識して生活したいと思います。

アクションプランづくりと発表
「全国・世界の、未来の高校生に伝えること」

講　　師

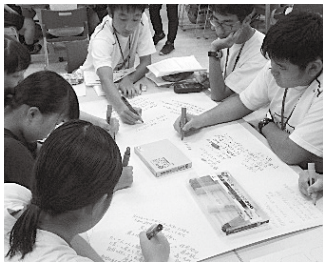
宮城県多賀城高等学校　**原田　　実** 先生

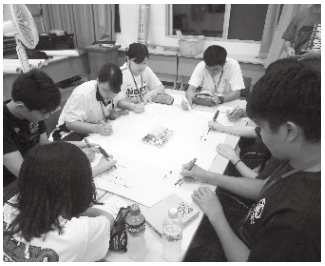
執筆担当者

宮城県築館高等学校　**鈴木　　弾、佐々木 淳、田代 比奈**

◆ 活動内容

２日目の夕食後に大研修室で行われた「アクションプラン作りと発表」では、原田先生のご指導の下、２日間の研修で学んだことを基に防災ジュニアリーダーとして今後の活動をアクションプランとしてまとめました。各班毎に、マインドマップの手法を用いて意見を模造紙にまとめ、「全国・世界の、未来の高校生に」伝えたいメッセージも添えました。各班の発表では「災害を語り継ぐことの大切や、自分たちの住んでいる地域の地形の特徴を知ることの大切さ」等、災害の風化を防ぐことや災害との向き合い方等が発表されました。最後に原田先生からは、「パレスチナでは３月11日に凧揚げをし、日本の被災地を励ます活動をしており、今回の研修も小さいことかもしれませんが、思いは世界に伝わります」とのお話を頂きました。今回考えた各班のアクションプランやメッセージが国境を越えて「全国・世界の、未来の高校生」に届くことを心より願っております。





執筆担当者

岩手県釜石市立釜石東中学校　**川崎 祐奈、山﨑 成美**

◆ 感じたこと／学んだこと

私達はグループ内での話し合いや他のグループのアクションプランの発表を聞き「知ること」「伝えること」「学ぶこと」「行動すること」の４つの視点の重要性を改めて感じました。

はじめに、「自分の街のこと」を詳しく知ることです。例えば、通学路に「河川が近くにあるか」や「津波浸水区域はどこか」など、自分の街の危険な場所や避難所の場所や豪雨時の河川の様子などの特徴を知り、いざという時に自分の命を守る準備を普段からしておくことが必要です。

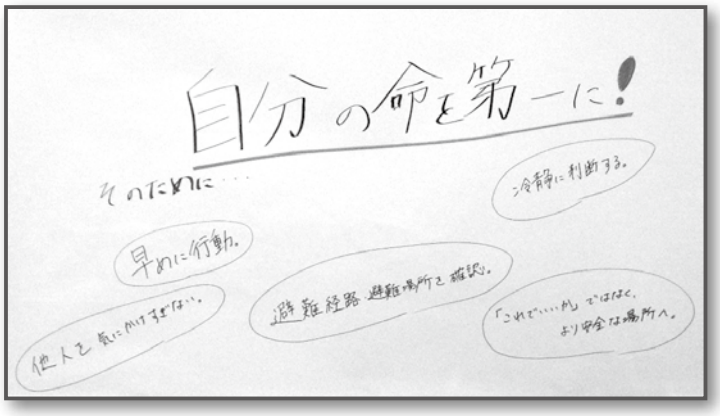
次に、私達に教えてくれた祖父母のように、津波の恐ろしさや体験したこと、どのような被害があったかを、災害を経験していない人やこれからの世代に「語り継ぐこと」が私達の役割なのだと感じました。さらに、「知ること」「語り継ぐこと」「行動すること」を支える「学ぶこと」が中学生の私達が一番取り組みやすく身近な防災の取り組みだと感じました。中学生の私達に「できること」は限られていますが、「いざという時」に備えて、様々な知識を身につけていかなければいけないと強く感じました。

各班のアクションプラン

「全国・世界の、未来の高校生に伝えること」

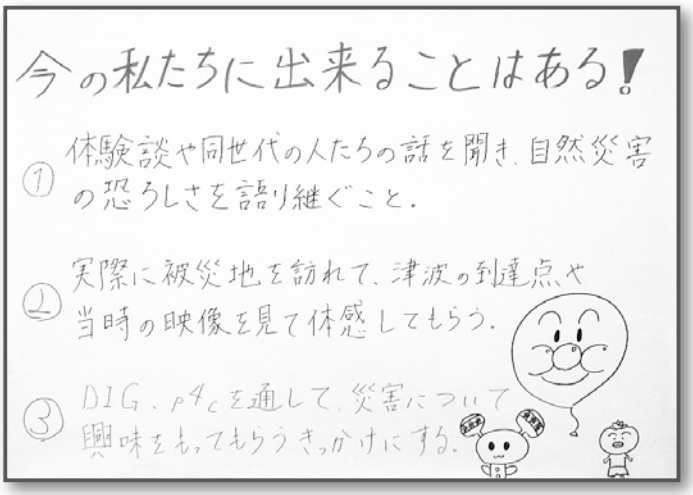
1班 メンバー

北海道厚真高等学校　蓮池 柚奈
　　山口 海梨
北海道奥尻高等学校　木元 さくら
　　白戸 琳
　　宮本 卓弥
宮城県築館高等学校　千葉 尚大
岩手県宮古工業高等学校　大久保 颯
宮城県多賀城高等学校　佐藤 清華



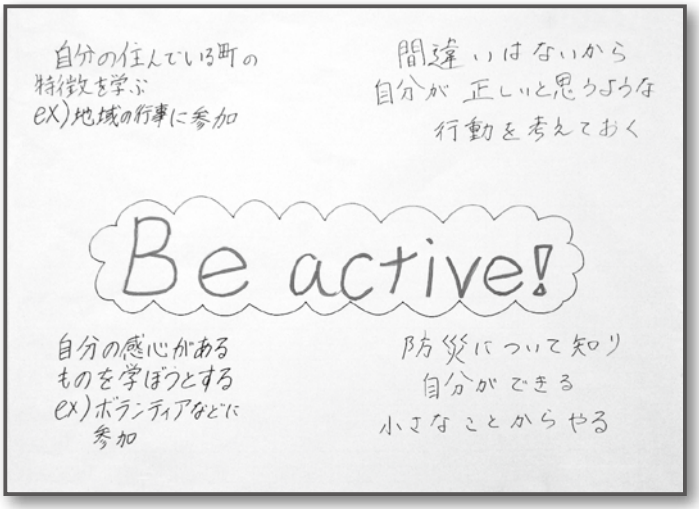
2班 メンバー

岩手県立宮古工業高等学校　佐々木 駿
秋田県立秋田北鷹高等学校　藤島 千華
　　柴田 佑介
福島県立小高産業技術高等学校　福山 大騎
東京都立大崎高等学校　古屋 敦健
成城高等学校　米倉 心之介
宮城県多賀城高等学校　佐藤 美咲
宮城県築館高等学校　笠松 萌花



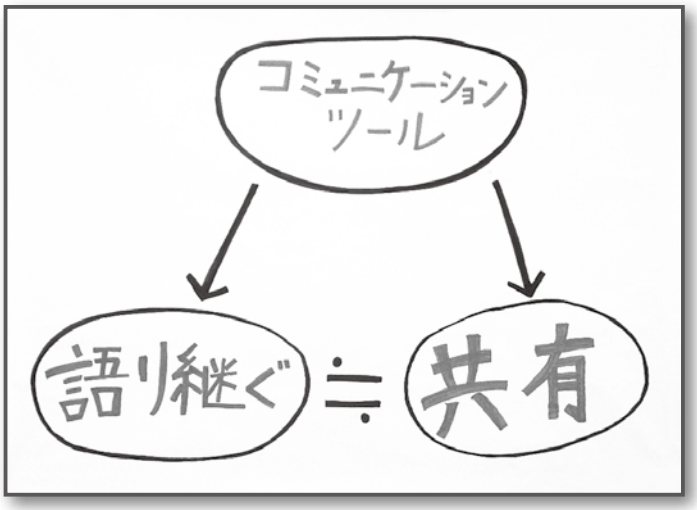
3班 メンバー

成城高等学校	小林 大晟
新潟県立糸魚川白嶺高等学校	清水 綾乃
	古市 朱莉
千葉県立館山総合高等学校	伊藤 礼奈
	宇井 愛
宮城県石巻西高等学校	後藤 亜美
宮城県多賀城高等学校	細井 美桜
宮城県築館高等学校	中鉢 紀美恵



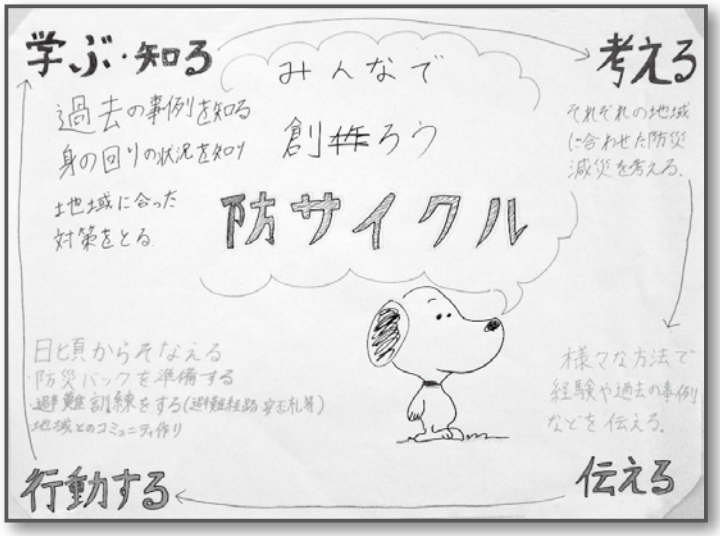
4班 メンバー

宮城県石巻西高等学校	佐藤 晴菜
兵庫県立舞子高等学校	冨田 彩翔
	佐藤 祐太朗
	羅川 尚
	藤井 大地
宮城県多賀城高等学校	村上 真綺



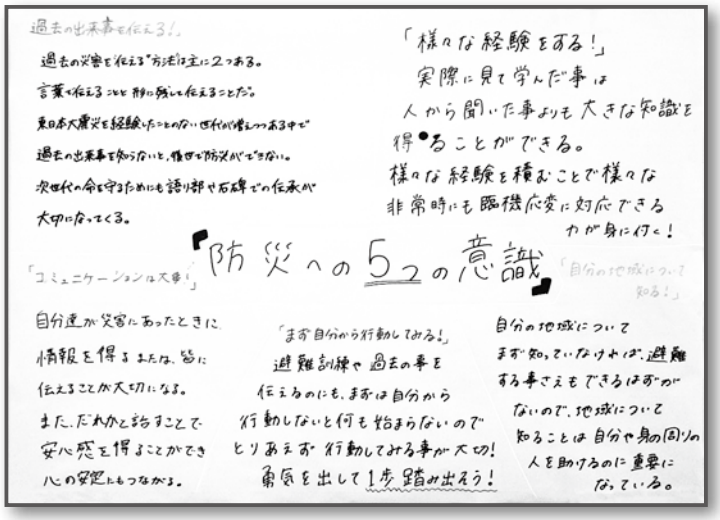
5班 メンバー

兵庫県立舞子高等学校	森　亮太
熊本県立熊本第二高等学校	長濱 勇気
	稲留 慎之佑
釜石市立釜石東中学校	川崎 祐奈
	山﨑 成美
気仙沼市立階上中学校	千葉 夏愛
宮城県多賀城高等学校	新沼 侑晟



6班 メンバー

多賀城市立東豊中学校	及川 颯太
	佐々木 俊輔
宮城県築館高等学校	鈴木　弾
	田代 比奈
	佐々木 淳
宮城県多賀城高等学校	久我 美咲



ジオパーク見学

講　　師

宮城県築館高等学校　**生徒**
駒の湯温泉　**菅原 昭夫** 氏

執筆担当者

宮城県石巻西高等学校　**後藤 亜美、佐藤 晴菜**

◆ 活動内容

【 荒砥沢 】

栗駒山麓では、3,500か所で災害が起こった。そのひとつが国内最大級の被害といわれている地滑り。

その範囲は縦1,300メートル、横900メートルの範囲に広がっている。柔らかい火山噴出物の上に重くて堅い堆積物が層をなす地質が、発災の大きな原因となっている。この見学を通して、改めて自然災害の悲惨さを痛感した。

【 駒の湯慰霊碑 】

岩手・宮城内陸地震で発生した大規模土石流被害から３年後に建立された慰霊碑。花を手向けて黙祷を行った後に、周囲の様子と当時の状況写真を見比べると、被害の大きさだけでなく、多くの方々のボランティア活動によって、ここまでの復旧が行われたことに感銘を受けた。二度と起きて欲しくない災害だが、いつどこで災害が起きてもおかしくない日本で生活しているので、日頃から迅速な対応を心がけたいと、強く感じた。

【 駒の湯温泉 】

土石流被害に巻き込まれながらも、助かった温泉湯守の菅原昭夫さんからお話をうかがった。私たちが立っている場所は災害前より６メートル近く土砂が堆積してしまったことや、源泉も埋まってしまい途方に暮れてしまわれたとおっしゃっていた。

その後、枯れていた源泉が別の場所から湧き出ていたのが発見されてから、地区の方々や温泉復活を願うプロジェクトメンバーによって、営業再開に至ったことをお聞きして、諦めない心と周囲の協力体制の大切さを学ぶことができた。

執筆担当者

兵庫県立舞子高等学校　**佐藤 祐太朗、羅川　尚、冨田 彩翔、藤井 大地、森　亮太**

◆ 感じたこと／学んだこと

岩手・宮城内陸地震は想定外の被害をもたらした。地すべり冠頭部見学の時に、滑り落ちた土砂の面積は、100メートル×100メートルのグラウンド98個分で、東京ドームに換算すると20個分となり、日本最大級であるということを教わった。私たちは、この災害に対しては知らないことばかりだった。だから、衝撃が大きかった。自分たちの知らなかった災害について学ぶことで、新しい知識を得たり、今までとは違う視点からの防災を考えたりできるようになる。

また、私たちがこの災害について無知だった要因の一つに、メディアの対応が考えられる。メディアはその後発生した東日本大震災の報道にスイッチし、岩手・宮城内陸地震の報道をほとんどしなくなった。メディアは常に新しいことを報道する傾向にある。だから私たちはこれから、過去に起こったことにも関心を持ち続けたい。また、埋もれてしまった過去の災害について学んでいきたい。

執筆担当者

気仙沼市立階上中学校　**千葉 夏愛**

◆ 感じたこと／学んだこと

栗駒山麓ジオパークの見学では、宮城県築館高等学校の先輩方による説明があり、とても分かりやすかったです。

最初に見学した「駒の湯温泉」は、2008年の岩手・宮城内陸地震で、大規模な地すべりが起き、崩れた土砂に遮られ、流れを変えた土石流に襲われ大きな被害を受けた場所でした。その場所で、被災する前から湯守をしていた菅原昭夫さんから災害時の話を聞きました。私は、「どこにでも危険な場所がある」という言葉が印象に残りました。防災を考える上で重要なキーワードだと思いました。

次に見学したのは「荒砥沢」です。私の目に飛び込んできた光景は、崩れて地層が露わになった崖でした。その場所には道路があったという話を聞き、驚きが隠せませんでした。

自然災害は、いつ起こるか分かりません。語り部の菅原さんのお話にもあった、「どこにでもある危険」に常に備えておくべきだと感じました。

感想文集（東北）　～合宿の感想や今後の取組について～

北海道厚真高等学校
２年　蓮池 柚奈

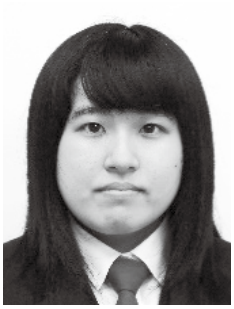
「防災ジュニアリーダー育成合宿　東北に参加して」

私は今回、合宿を通して災害や防災のことを学び、自分が体験したことのない自然災害の脅威をとても身近に感じました。被災地案内で多賀城市内を歩き、津波の到達点を示す赤いマークを見て回った時、私はとても衝撃を受けました。電柱や歩道橋など全国どこにでもあるようなものに記されたそのマークは急いで逃げるには厳しいほどの高さを示し、津波被害にあったことのない私でもとても他人事には感じられませんでした。ジオパーク見学では、大規模な地すべりを起こした山がダムを崩壊していた可能性や、その山の中には元々道路があったと聞き、より一層目の前に広がる、崩れた山々は恐ろしいものだと強く実感しました。私はこの合宿で、色々な方々を通じて自然災害の恐ろしさを伝えて頂き、様々なことを学べました。今後私は学んだことを忘れないだけではなく周囲に広め、もっと防災について学んでいきたいと思います。

北海道厚真高等学校
２年　山口 海梨

「防災ジュニアリーダー育成合宿　東北に参加して」

私は今回の合宿で自分達の体験を、勇気を出して伝えることの大切さ、減災のために自分達ができることは何かを考え、行動することの大切さを学びました。グループ毎で議題を１つ決め、討論することによって様々な観点から話し合いができ、とても深い討論ができたと思います。東日本大震災の体験を紙芝居にしたお話を聞いたのですが、私はその紙芝居を描いた方とても似た体験をしたので、聞いていて胸が苦しくなりました。しかし、災害の恐ろしさがしっかり伝わり、被害を防ぐにはどんな備えが必要かを大変考えさせられました。私たちは平成30年に起きた北海道胆振東部地震で震度７の揺れを体感し、大規模な土砂崩れも経験しました。しばらく大きな余震が続き、電気も水も使えなくなり、自然災害の怖さを改めて実感しました。普段からしっかり防災への意識を持ち、避難訓練などに積極的に参加していこうと思いました。

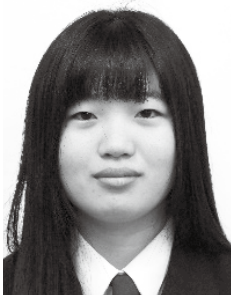


北海道奥尻高等学校
３年　木元 さくら

「合宿を通して学んだこと」

今回の全国防災ジュニアリーダー育成合宿では、多くのことを学ぶことができました。

ワークショップで避難経路を考えるという活動では、実際に災害が起こった時のことを考えながら経路を変える必要がありました。ただ避難する場所を決めるだけではなく様々なことを踏まえて災害に対する備えが必要だということを学びました。荒砥沢見学では、初めて地滑りというものを間近で見ました。予想以上に荒々しく、自然の力は恐ろしいものだと感じました。また、私は地震が来た時に真っ先に津波に対する備えを取るという考えしかなかったため、自分にとっては新しい発見でした。これから地震の二次災害についてさらに学ぶ必要があるということも分かりました。私たち奥尻高校生は９月に、世界中の高校生と防災について話し合う「世界津波の日2019　高校生サミット」に参加します。そこで今回学んだことを発信し、より深く防災を知り考えられる人になれるよう努めたいと思います。



北海道奥尻高等学校
３年　白戸　琳

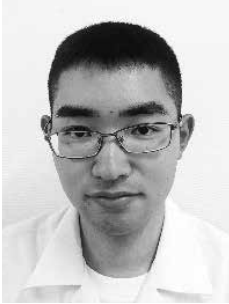
「全国防災ジュニアリーダー育成合宿を終えて」

私はこの２泊３日を過ごすなかで、『自分たちにできる防災』とは何かをずっと考えて過ごしました。多賀城高校のまち歩きや築館高校のジオパーク見学の際に行ってくれたガイドや、語り部の方の話を聞いたこと、また、ワークショップでアクションプランを作成したことなどを通して、災害の恐ろしさを伝えること、語り継ぐこと、共有することも「防災」に繋がると感じました。これから、９月に行われる「『世界津波の日』高校生サミット2019 in 北海道」において、自分の町の防災のガイドをするので、災害の恐ろしさ、防災の大切さを伝えて行きたいです。

北海道奥尻高等学校
2年　宮本 卓弥

「サポートし合うことの大切さ」

今回の合宿ではたくさんの学びがありました。図上訓練の大切さや被災地の現在の状況等、これまで学習してきた以上のことをたくさん学ぶことができました。その中でも、特に印象に残ったことは、紙芝居を読んでくれた大学生の方々のお話です。当時、仲が良かった幼なじみを亡くし、とても悲しんでいる彼女を見た同級生のサポートにより、すぐに立ち直ることができたというお話を聞き、改めて回りのサポートの大切さを感じました。災害時、自分たちにできることは何かと考えると、町の復興ではなく、心の復興だということに気が付きました。今回学んだサポートの大切さなどについて、９月に行われる「『世界津波の日』高校生サミット2019 in 北海道」や奥尻高校で行われている防災についての町おこしワークショップなどの場で共有し、世界レベルで防災意識を高められるよう、今回学んだことを踏まえ、後世に受け継いでいくための知識の整理などを行っていきたいと思いました。

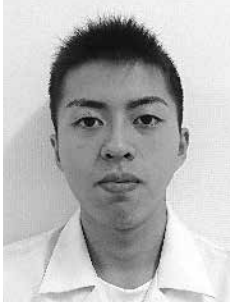


岩手県立
宮古工業高等学校
3年　大久保 颯

「防災合宿を振り返って」

初日に行った、「まち歩き」では多賀城高校さんの案内のもと、まち歩きを行いました。多賀城高校の方々と一緒に被災場所に行き、タブレット等を使用して説明していただき当時の状況や、どのようにして防災活動をしているのかを理解することができました。アイスブレイク後の紙芝居実演では、津波の悲惨さや避難をした後には後戻りをしてはいけないことを理解することが出来ました。２日目には多賀城オリジナルDIGと基調講演、沢活動を行いました。DIGでは紙面で避難のシミュレーションを行い、同じ班の人たちと話し合いながら避難場所にたどり着くことが出来ました。また、基調講演では他の地域の意見なども聞く事が出来ましたし、沢活動においては、実際に沢を歩いて自然の偉大さを実感することが出来ました。３日目は、ジオパーク見学をして地層について深く学ぶことが出来ました。

この合宿を通じて学んだことを、今後の防災活動に役立てたいです。



岩手県立
宮古工業高等学校
3年　佐々木 駿

「防災合宿を通して」

私は、今回の防災合宿を通して自然災害はどのようにして防止するのか等の災害に対する向き合い方を学びました。全国から集まった他校の生徒さんの意見を聞いて、今まで自分が考えてこなかった災害についての考えを知る良い機会となりました。

活動中で最も印象的だったジオパーク見学では、実際に岩手宮城内陸地震の地滑りで大きな被害を受けた温泉宿の方のお話を聞くことができました。当時の状況から現在に至るまでを詳しくお話いただきました。そこで、今の私達に出来ることは、大規模災害を風化させず未来に語り継ぐと言うことだとお話いただきました。この言葉を聞き私も、本校で行っている疑似津波体験模型による東日本大震災津波の伝承活動をさらに頑張ろうと思いました。この他の活動においても、災害についての考え方や今後どう向き合っていくべきかを学べたので、これからもしっかり災害に向き合っていこうと思います。

秋田県立
秋田北鷹高等学校
3年　柴田 佑介

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿を通して」

私の住んでいる地域は内陸で、津波とは関わりがありません。しかし、同じ日本で起きている災害について興味をもち、参加しました。「まち歩き」では、実際に津波の被災地を見学して、被害の大きさを実感しました。またいろいろな対策もされており、防災についての意識の高さを感じました。DIG活動では、避難についての大切なことや、起きそうな出来事を考えて活動できました。今後、この経験を活かして地元の防災マップを作ってみたいです。沢活動やジオパーク見学では、別の視点から地震を見て防災について考えることができました。また、アクションプランやp4cなどを通して、他の地域の人と防災について話し合いができて、大変良い経験ができました。今回の合宿で学んだことを、自分のものだけにせず、学校や地域に伝えて防災についての意識を皆で高めていきたいです。

秋田県立
秋田北鷹高等学校
２年　藤島 千華

「合宿を終えて」

私は、全国防災ジュニアリーダー育成合宿に、初めて参加しました。今まで、このような防災に関する合宿に、参加したことはなかったので、最初は「防災ジュニアリーダー育成合宿」って何を学びどんなことをするのか、楽しみでありましたし、同時に不安もありました。しかし、私の不安は杞憂に終わりました。なぜなら、初対面にもかかわらず、皆とても積極的に話しかけてくれ、打ち解けることができたからです。

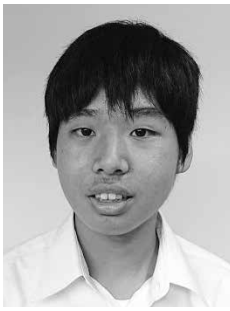
そして防災について、私が特に印象に残ったのは、DIGです。どうやって逃げるのか、不測の事態の時は、どのように対処するのかを、地図を基に班の皆と協力して、避難経路を確立することができました。そしてもう一つ、私は被災地案内の「まち歩き」も強く印象に残っています。実際に津波が到達した地点・高さを、電柱などに貼ってあったシールで見て、自分の背丈よりも高い津波が来ていたことに、驚きましたし、同時に怖くもありました。しかし、自分や周りの人の命を守るためにも、この合宿は本当に良い体験になりました。

福島県立
小高産業技術高等学校
２年　福山 大騎

「今回の研修で学んだこと」

私は今回の防災合宿で普段は体験できない多くのことを学びました。被災地視察では津波の被害にあった町が同じ被害が起きぬよう、電柱や横断歩道、ショッピングモールの壁面や階段に、浸水時における津波の最大の波の高さを記したり、自分がいまどこにいるかを示すため現在地がすぐにわかるQRコードを各場所に配置したりと前回起きた津波の経験から、対策が行われている様子が見られました。沢活動では自然に触れ合い、自然災害によって変化した沢の地形や断層を視察し、そこで何があったのか、仮説を立て、考えることで、自然災害に対しての理解を深めることができました。

研修のまとめとして、防災のシミュレーション、沢活動、被災地の現状の視察、そして、それらに対しての各グループで話し合い、私達はこれから何をし、未来のためにどう貢献できるかを考え、防災の関心を高めるだけでなく、先の未来を見通すこと、そしてそれを見通した上での対策を考えることの大切さを、今回の合宿で学ぶことができました。

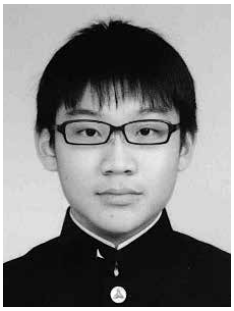


東京都立大崎高等学校
１年　古屋 敦健

「３日間で学んだこと」

今回の合宿で、地震や津波など災害の恐ろしさを学びました。多賀城周辺の町歩きで、津波の波高標識を見て、津波がすごい高さで町を襲ったことを感じました。また、津波によって友人を亡くした体験を紙芝居によって語り伝えている被災者の話は、心に深く残りました。荒砥沢や駒の湯の大規模な土砂崩れの見学では、地震によって地形がこんなにも変わってしまうのかと驚きました。また、駒の湯温泉は、現在温泉に入れるようになるまで復興が進み、凄いと思いました。

今回訪問した宮城県栗原市では、２度の大地震によってうけた、様々な被災地を見学しました。合宿を通して、我々は、いつ起こるかわからない大地震に何か対策していくことが大事であることを学びました。災害を甘くみてはいけない。災害大国日本だからこそ、災害の少ない国々などに災害の恐ろしさを伝えていかなくてはいけないと思いました。



学校法人成城学校
成城高等学校
２年　米倉 心之介

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿を終えて」

私は今回この活動に初めて参加し、防災に関しての知識やリーダーとしてどうあるべきかなど、今の私に足りないことを多く学ぶことが出来ました。今回の育成合宿を通して大きく感じたことは、全国の中高生の防災意識の高さと自分のリーダーとしての力の無さです。東京都の中高生は東北のように津波や土砂災害などの甚大な震災被害を経験していません。実際に被害にあった中高生の経験談などを聞くことにより、ニュースでは伝えられない生々しい事実も知ることが出来ました。

私は、生徒会副会長として今回の合宿で学んだことを、生徒会の他の生徒や先生に共有し自地域の防災活動に還元していきたいと考えています。また、東日本大震災の日、私はまだ小学生であり怯え守られることしかできませんでした。しかし、現在はもう高校生。守られる側ではなく、守る側として地域や社会に貢献していきたいと思います。

学校法人成城学校
成城高等学校
2年　小林 大晟

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

私はこの合宿に参加する前、あまり防災に対して関心がなかった。なぜなら私が実際に経験したことのある大きな災害は東日本大震災のみで、それも私にとっては過去のことになりつつあったからだ。しかしこの合宿はそんな私を大きく変えてくれた。

私の中で最も変化したもの、それは意識だ。地滑りや津波の被害の現状を見て全く過去のものではないと知った。恐らくこの合宿が無ければこのような現状を知ることはなかっただろう。また、DIGなどを通して少なくとも私は自分の置かれている状況を把握しなければならないと考えるようになった。これらのことより、私の防災に対する意識は大きく変わったのだと思う。

今更だが、自分の低かった防災への意識が改善されたことで私はよかったと感じた。知らないという状況はどれだけ恐ろしいことかを知れたことがこの合宿に参加して最も自分のためになった。

新潟県立
糸魚川白嶺高等学校
1年　清水 綾乃

「合宿に参加して」

私はこの全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、多くのことを学び、得ることができました。学んだことは、災害を風化させないことの大切さと、自分たちに何ができるのかを考えることの大切さです。災害を風化させないために、津波が来たところに標識を設置していました。歩いていると目に入ってくるので防災の意識が高まると思いました。自分たちに何ができるのかを考えるためにp4cという活動をしていろいろな地域で高校生などが行えることについて話し合いました。地域によって様々な活動をしていたので、もっと私にもできることがあるのではないかと考えるいい機会になりました。得たものはたくさんの友達です。２泊３日という短い時間でしたが、いろいろな場面で交流することができ、学年関係なく仲良くなることができました。自分自身が成長できた３日間でした。

新潟県立
糸魚川白嶺高等学校
1年　古市 朱莉

「合宿を通して」

私は全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、改めて防災の大切さを学びました。初日の街歩きでは、水位の低い津波でも人が死んでしまうということや、都市型津波は普通の津波よりも水位が高くなるということを知りました。２日目のワークショップでは、DIGを始めて知り、実際にやってみて、あらかじめルートを決めておく大切さを知りました。p4cでは、自分たちで話題を考えました。私たちのグループは、答えがない話題でした。とても難しかったですが、ひとりでは考えられないようなところまで考えを深めることができました。三日目の見学では、地滑りの怖さを知りました。被害にあわれた方の話を聞いて、自分ならどうしていただろうと考えました。災害にしっかり向き合い、自分にできることを積極的にやりたいです。

千葉県立
館山総合高等学校
3年　伊藤 礼奈

「防災合宿に参加して」

今回の防災合宿に参加し、防災や災害について深く考えるきっかけを与えてくれました。多賀城校生によるDIGを行う前の私は、地震が起きたら“とりあえず避難所に逃げる”という考えしかありませんでした。しかしDIGを行った後は、避難している道中では何が起こるのかわからず、自分の思っている道が通れないことや様々なハプニングがあること、班の仲間でも考え方が各々で異なることを知りました。この経験から、自分の考えを見直すことができとても良い機会になりました。まち歩きの風景や地すべりした場所を見て「自然の力は怖い」と思いましたが、本当の恐怖は災害にあった人しかわからないかもしれません。しかし、その恐怖はいつ誰に襲ってくるかわからないので、私たちに今できることは何か、災害時にどのような行動をとるべきか一人でも多くの人に考えてもらうために、まずは今回の経験を伝えていくという行動に移したいと思います。

千葉県立
館山総合高等学校
２年　宇井　　愛

「３日間で学んだこと」

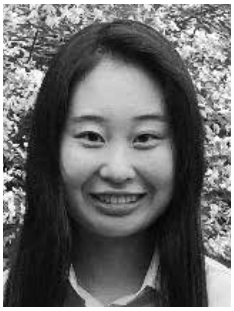
この３日間で学んだことは、想像を超えることばかりで、心に残ることが沢山ありました。まず印象に残ったのは１日目の街歩きです。実際の被害現場であるイオンの屋上で、目の前まで襲ってくる津波の動画を見て、本当にこのようなことが起きてしまうのかと、想像ができないほどの恐怖を感じました。そのような中で、多賀城高校の方が津波波高標識を自分たちで設置した話や積極的に説明してくださる姿を見て、強い思いを感じると同時に自分の防災意識の低さを実感しました。次に２日目に行ったDIGです。建物の状況や避難経路途中でハプニングが起こった時の対応を、グループで相談しながら考えることに苦戦しましたが、災害の時に瞬時に的確な判断が求められることや、限られた時間の中でグループの考えをひとつにまとめる勉強になりました。ここで学んだDIGなどを家庭クラブ役員に広め、私の学校や地域の防災意識を高めていきたいと思いました。

宮城県石巻西高等学校
２年　後藤 亜美

「高校生ができる防災活動とは」

二度目の参加となったこの合宿。今回は自然豊かな花山での開催ということで、手で触れたり自分の足で移動したりなど、映像などでは味わえない自然の力を感じることができました。荒砥沢冠頭部の見学では、土砂崩れ規模の大きさに圧倒されました。私が住んでいる地域では、災害と言えば地震や津波をイメージしてしまうのですが、山間部特有の災害について学ぶことができました。

合宿を通して、他校の防災活動についてたくさん話し合えたことが一番よかったです。話し合いがどんどん展開していくうちに、このような発想・実践があるのか、と感心しながら受け入れることができました。自分の思いを周囲に伝えることが、方向性を広げ深められるので、防災学習の一環として、生徒たち自身の考えを共有し、発信できる場を設けるように今後は取り組んでゆきたいと思いました。



宮城県石巻西高等学校
２年　佐藤 晴菜

「防災活動を広げるために必要なもの」

今年の冬に淡路島と舞子高校で行われた合宿に引き続き、花山の合宿にも参加することができました。前回で得たものとはまた違うものを学び、防災や災害について考え、周囲の人たちと共有することで物事に対する視野を広げることができました。

この三日間を通して特に勉強になったのが、野澤令照先生の基調講演でした。ひとつのテーマについて一人一人が考え、その意見を述べていくことで自分一人では考えられなかった事柄に気づき、それを集約していくp4c。この活動を通して、コミュニケーション力や協調性を構築することの重要性を改めて強く感じることができました。

今回の合宿では、災害の知識はもちろん、自分の考えを周りに発信したり、相手の意見に耳を傾けたりなど、コミュニケーションをとることができ、互いに顔を見て対話することの大切さを再確認することができました。

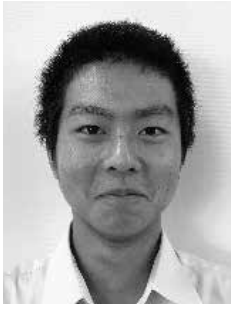
兵庫県立舞子高等学校
３年　冨田 彩翔

「東北の経験を神戸で活かす」

今回の合宿に参加したことは、自分の住んでいる神戸から離れた東北のことを知ったり、東北の高校生たちと関わったりすることができる、私にとってとても良い機会になりました。

私は、沢活動と宮城教育大学の野澤教授の「p4c」のことが印象に残っています。沢活動では、沢で起こりやすい災害のこと、その時の行動や備えのことなどを詳しく教えていただくことができました。沢でのフィールドワークは初めてのことでしたが、沢の状態や地質を、自分の目で見て聞いた方が発災時のことがイメージしやすく、自分ならどうしたらよいかといった考えが浮かびやすいと感じました。「p4c」では、宮城県沿岸部にいると仮定して、「もし、東日本大震災の日に戻ることができたら」というお題で話し合い、東日本大震災当時の行動も踏まえたお話を聞かせていただきました。その場にいた人、いなかった人それぞれのちがった考えを聞き、聞くことや伝えることの大切さや難しさを再認識させられました。

今回の合宿で、街歩きや沢活動など多くの経験することができ、別の場所での街歩きや活動などに参加し、自分の活動の視野をもっと広げていきたいと思います。

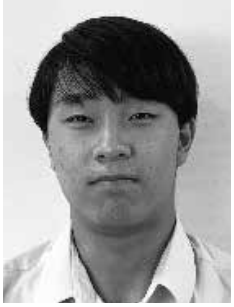


兵庫県立舞子高等学校
3年　佐藤 祐太朗

「私がこの先やるべきことについて」

私は、この合宿で初めて知ったことが２つある。１つ目は、多賀城高校生が設置している津波波高標識の設置には手続きが必要だということだ。しかも、国の所有しているものに設置する場合には手続きが特に大変で､期間も長くかかってしまうということだった｡このことを知って、多くの市民にとって役に立つことをしているのに、行政によって津波波高標識を設置する人が足止めされてしまうのはおかしいと感じた。私は行政職を志望しているので多くの人にとって利益になる取り組みを、できるだけ行政中心となって実現できる社会を目指したい。２つ目は、岩手・宮城内陸地震での被害についてだ。私はこの災害に対しては知らないことばかりだった。それは、すぐのちに起こった東日本大震災による影響もあると思うが、自分自身もこの災害についてあまり関心を持っていなかった。でも、この合宿に参加したことを経て、岩手・宮城内陸地震の被害について知ることができた。

私はこれから、今回の合宿で新たに学んだことを、残りの高校生活の中でだれかにつなげていきたい。



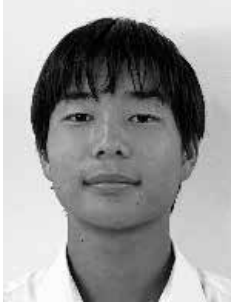
兵庫県立舞子高等学校
3年　羅川　尚

「私が変わった合宿」

私はこの合宿を通して、自分が変わりました。その１つは、知らない人とも協力できたことです。知らない人がたくさんいる環境の中で、自分の意見を積極的に発言することは、今までの僕には難しいことでした。しかし、この機会に自分にそのような力がついたと思います。「p4c」などを通してたくさんの人と話せる場で、自分以外の人がたくさんの意見を出していて、自分も意見を発表してもいいのだという気持ちになりました。だから、色々な意見を出すことを経験し、人と人が協力することによって今まで自分では考えたことの無いような内容の意見も知ることができました。

２つ目は、岩手・宮城内陸地震での地すべり被害を風化させまいと強く思う心を持ったことです。地震の存在自体は知っていましたが、地すべりの被害があそこまで大規模なものだとは知りませんでした。だから、心の準備が何もないまま被害状況を見てしまい、とても大きな衝撃を受けました。

私は将来の選択肢の中に教師もあります。被害状況を生で見たからこそできるやり方で、教師という立場から後世に伝えていきたいと思いました。

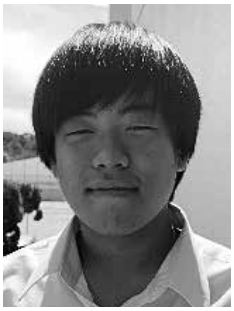


兵庫県立舞子高等学校
2年　藤井 大地

「後世に語り継いでいく」

私が、ジュニアリーダー合宿に参加して感じたことは、震災を「語り継ぐ」ことの難しさです。

３日間の中で､「シロツメ草の約束」の語りや､実際に東日本大震災で被災された合宿メンバーから、それぞれが経験されたことを私たちに伝えてくださりました。様々な事実を知り、被災された方の思いを知れば知るほど、被災していない私たちや未来の子供たちがどうやって語り継いでいくのかが難しいと感じました。なぜなら、被災していない人が語り部になった時に、自分自身の体験ではないことで､質問に答えられず上手く伝えるのは難しいと思ったからです。でも、語り部になるだけが伝える方法ではないと、合宿を通じて理解しました。言葉で伝えるという方法も一つですが、多賀城市の津波遡上記録など目に見えるモノとして残す方法もあります。だから、私たち被災していない人が東日本大震災などの巨大地震をどうやって語り継いでいくのかをこれから考えていきたいです。



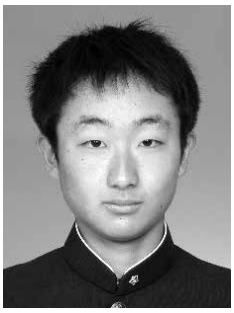
兵庫県立舞子高等学校
1年　森　亮太

「風化に立ち向かう」

僕は今回の合宿で、東日本大震災で被害を受けた地域がどのような復興を遂げているのか、他都道県がどのような活動を行っているのかを知りたくて参加した。

東北に行く前の僕の予想では、まだ復興には時間がかかる部分があると思っていた。ところが、宮城県多賀城市で街歩きをしてみると、震災の爪痕がもうすでに無くなっているところがほとんどで、これが風化の一つの原因だと感じた。だが、多賀城高校の生徒が爪痕を目で見て分かる形に残そうと住民や市などと話し合いを重ねながら津波波高標識を自分たちの手で設置していることに、これから未来へ残していかなければならないという思いが伝わってきた。また、設置するだけでなく街歩きの案内役をすることで全国に発信していこうとしている姿勢に驚き、僕たちも防災や阪神・淡路大震災について未災者なりにでも発信していかなければならないと改めて感じた。

街歩きや荒砥沢崩落地見学といった近年実際に起こった場所を見学することで、当時の状況と比較でき理解しやすいように感じた。神戸でも当時の記録と今の姿を比較しながら見る街歩きをしようと思う。



熊本県立第二高等学校
２年　**長濱 勇気**

私は、今回の全国ジュニアリーダー育成合宿東北に参加して、次の熊本で実施される西日本の合宿に向けて、成長することができました。まず、防災に対する知識です。全国から集まった中高生のみなさんと話をする中で、阪神淡路大震災や東日本大震災、岩手・宮城内陸地震などの痛ましい経験から被害を少なくするために生まれた避難訓練や防災センターの活用など、地域ごとの防災に対する取組方法を聴くことができました。次に、今回初めて実際に東日本大震災と岩手・宮城内陸地震の現場を見て、ヒトの力では完全に止めることのできない自然の驚異を改めて体感しました。そして、災害に対する理解、それを使った瞬時の判断の大切さも学ぶことができました。最後に、コミュニケーションです。全国から集まった知らない人だらけの環境で、私ははじめ活動していけるか不安でした。しかし、このままでは何も始まらないと思い、思い切って発言してみました。すると、そこから話し合うことができました。これは、混乱した災害の現場でも同じだと思います。積極的に行動する力を研修のプログラムの中で、身に付けることができました。第二高校は、次のリーダー合宿の案内役です。だから、今回学んだことを活かし、災害の恐ろしさ・防災の大切さを次回参加する学校の人たちにしっかり伝えていきたいと思います。今回は、とても貴重な体験に参加させていただいて、ありがとうございました。

熊本県立第二高等学校
２年　**稲留 慎之佑**

今回､私は全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して､２つのことを経験することができました。
１つ目は、地震の恐ろしさや自然災害の前では人間は無力であることを再確認できたことです。地震や津波、火山の噴火や台風といった大きな災害は、甚大な被害をもたらし、たくさんの命を奪っていきます。特に、私たちの住む日本は災害が多い国として知られています。だからこそ、私たちはより深く災害を認知し、対策をしていくべきだと思います。災害は残念ながら、私たちの力でなくすことはできません。なくすことが出来ないのであれば、私たちはより一層、防災・減災への努力をしていくべきだと思いました。
２つ目に学んだことは、協力すること、コミュニケーションをとることの大切さです。今回の合宿では、初めて会った同年代の人たちと意見を交わす機会が何度もありましたが、この経験は、実際に大きな被害が起きた時でも役に立つと思います。たとえば、近所の人々の安否確認をするときも、日頃よりコミュニケーションを図っておけば容易ですし、避難所に行ったとしても、周りの人との協力で過ごしやすい環境に変わると思います。そのためにも、コミュニケーションを大切にして日頃から生活していきたいと思いました。
次は、私たち第二高校が主管校となって、西日本で行われる防災ジュニアリーダー育成合宿を開催します。今回の経験を十分に活かし、全国の高校生から防災のリーダーを輩出していけるとよいと思います。

釜石市立釜石東中学校
２年　**山﨑 成美**

「学びの３日間」

今回初めて防災ジュニアリーダー研修に参加して、１日目のまち歩きで、当時の町の様子や今の町の状況を知ることができました。自分が住んでいる町の状況をもっと知っておくべきだと思いました。２日目のワークショップでは、緊急時にどこに避難をするべきか、そして途中で起きるハプニングに対応をし、どの避難経路を行くかを考えました。沢活動では、断層や岩石を見ることで、考えられる災害をイメージしながら活動に取り組みました。そういう視点で、川を歩くことはとても貴重な体験だったと思いました。この３日間を通して、防災のことで、ほかの人の意見や疑問などを聞くことができたので、とても有意義な機会となりました。そして、この合宿で学んだことは、私たちが次の世代に防災について伝えていくことが大切だと強く感じました。

釜石市立釜石東中学校
２年　**川崎 祐奈**

「今回の合宿を通して」

私が今回の合宿で学んだことは、大きく３つあります。１つ目は、他県の防災の取り組みです。特に、多賀城高校では、震災後、生徒自ら津波の高さを表す表示を電柱に取り付けるなど生徒一人ひとりの防災意識が高いことが分かりました。２つ目は､人と人とのコミュニケーションの取り方です。p4cやアイスブレイクなどの活動では、様々な人と話すこと、自分の考えを伝えることの大切さを学びました。高校生の方が積極的に声をかけてくれて、私も活動になじむことができました。最後に、この合宿は、全国各地からたくさんの中高生が集まり、その方達とワークショップを行い、被災していない学生も防災に関心を持っていることが分かりました。高い場所だから津波は来ないという考えはいけないと改めて感じました。また、私たちがあまり触れてこなかった土砂災害や都市型津波にも考えを深めることができました。

気仙沼市立階上中学校
3年　千葉 夏愛

「学び、つながり」

私は、３日間の合宿を通して、たくさんの「学び」や「つながり」の大切さを感じました。「学び」の面では、生徒同士でDIGやアクションプラン作りなどの活動を通して意見交換をする中で、考えを深めることができました。特に、p4cは一人一人の話に耳を傾けやすく、各高校の先輩方の防災に対する取組や考え方を知ることができました。また、お互いの顔が見えており、意見を発表しやすい雰囲気で、安心して参加することができました。

今回、合宿の参加者の多くは高校生の先輩方だったので、アイスブレイクで他己紹介をしている時も、とても緊張していました。しかし、沢活動やジオパーク見学などで、声を掛けてもらい、たくさん助けていただき、人との「つながり」のありがたさを実感しました。

この合宿の「学び」と「つながり」の大切さを学校でも共有し発信していきたいと思います。

多賀城市立東豊中学校
2年　及川 颯太

「合宿を通して」

今回の合宿で、僕はコミュニケーション能力を身に付けることができました。そう思うきっかけとなったのは、ワークショップでアイスブレイクという活動をした時です。アイスブレイクは、初対面の人と自己紹介をして、曜日ごとに予定を組んでいくという活動内容でした。参加者のほとんどが高校生の先輩方で、僕はあまり自分から話しかけられず、話かけられるのを待っているという形になってしまいました。でも、数人の先輩と自己紹介していく中で中学生でも優しく接してくれ、安心することができ、自分から積極的に声をかけることができました。今回、私が反省するべき点は、中学生だから受け入れないのではないかと自分から進んで行動しなかった事です。これからこのような機会があったら、恐れずに自分から積極的に行動するようにしたいです。

多賀城市立東豊中学校
2年　佐々木 俊輔

「防災合宿を振り返って」

私は今回の合宿を通して学んだことが２つあります。１つ目は、防災への意識を更に高められたことです。ワークショップで、他県の皆さんから、自分が経験した災害についてどう考えているか、自分達は何をしなければならないのかなどを真剣に考え、行動している話を聞き、災害について改めて知ることができました。

２つ目は、見て感じることの大切さです。「どんな災害に遭ったか」「どう変わったか」を聞くだけでなく実際に見たり、感じたりすることで災害の規模や悲惨さを知ることができました。私の地域も東日本大震災で被災していますが、地域によって災害の性質や被害が全く違うことを知ることができました。

この２つの貴重な経験を今後の学校生活等に生かしていきたいと思います。

宮城県築館高等学校
2年　鈴木　 弾

「全国防災会議に参加して」

私は今回の合宿に参加して、改めて自分たちの地域で起こった災害を理解しそれを深めることができました。

私はこれまで「岩手・宮城内陸地震」という名称は知っていても、それがどんなもので、どういう被害がでたのかなど知りませんでした。それを今回の合宿で行ったジオガイドをするにあたり、地元について勉強をし、様々なことを知ることができました。この合宿は私にとって自分の住んでいる地域への理解を深めるきっかけを与えてくれた素晴らしい体験でした。

また、今回の合宿ではコミュニケーションの大切さを改めて認識させられました。今回の合宿は全国の様々な地域から参加しており、当然自分の高校の人以外は初対面です。その人たちとどう打ち解けようか、それが今回の合宿で一番頑張って取り組んだ事です。

全体を通して、自分を成長させてくれた何物にも代えがたい合宿となりました。

宮城県築館高等学校
2年　田代 比奈

「全国防災会議に参加して」

今回初めてこの防災合宿に参加して、防災について深く考える事ができたのに加え、とてもたくさんのことを学ぶことができました。私は今まで二度の大きな地震を経験してきました。しかし、それ以外の災害は経験したことがなかったので、様々な地域の方と三日間の活動を通して津波などの地震以外の自然災害について新たに学ぶことができました。今自分にできることは何かを考え、行動する。そういった行動を積極的にしていきたいです。

また、私は栗駒山麓ジオパークのジオガイドとして参加者を案内しました。初めての試みだったため沢山悩みました。ガイドを通して伝承することの大切さを学びました。

この三日間を通して学んだ事は私の防災意識を大きく変えました。これから沢山の方に学んだことを伝承し、将来の防災活動に貢献できるよう生活を送っていきたいです。

宮城県築館高等学校
2年　佐々木 淳

「全国防災会議に参加して」

私はこの合宿に参加して、普段海の近くに住んでいないので、津波の恐ろしさや被害の大きさを肌で感じる機会があまりありませんでしたが、初日に多賀城の街を歩き、津波の大きさや恐ろしさを実感することが出来ました。そして、この実感を活かしてワークショップにも取り組むことができ津波に対する考え方や対策が身につきました。

この合宿に参加したからこそ全国の人達と繋がりを持つことができ、全国の学校の取り組みを聞くことができ、様々なことを学び・体験することができました。またジオガイドを通して、思うように伝えたいことが伝えられるか心配な所もありましたが、楽しく活動することができたので良かったです。

今後は、この三日間の合宿で学んだことを学校全体に伝えていき、全校で防災のことについて考えていけるようにしていきたいです。

宮城県多賀城高等学校
2年　佐藤 清華

「３日間を通して学んだこと」

今回の合宿を通して私は地震や土砂災害についての地理的な学習はもちろん、他校の生徒たちとの様々なワークショップと通じて「これからの世代の人たちに災害の記憶をどのように伝えていくか」ということについて話し合い、自分たちなりの答えを生み出すことができました。ワークショップでは、他校の生徒の皆さんと交流できたので、他県の様々な災害や被害について生の声をきくことができ、私自身、とても勉強になりました。また沢登り活動では、実際に沢に行って水の中を歩きながら地盤の堅さや地質を見たり、沢の周りにある土などを見て水害が起きた時の避難場所を考える活動も行うことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。今回学んだ知識を生かしながら、震災を風化させないために私たちができることは何か、これからも考えていきたいと思いました。

宮城県多賀城高等学校
2年　佐藤 美咲

「今の私たちにできること」

私は今回このプログラムに参加している間、「私たちにできることは何か？」についてしっかりと考えることができました。そして３日間のなかでその答えを１つだけ見つけることができました。この合宿で私は、被災地で紙芝居活動を行いながら語り部活動を続ける方々の話を聞かせてもらいました。友人を震災で亡くし辛い経験をした語り部の方は「亡くなった友人の死を無駄にしたくない」とその心境を話してくださいました。その言葉は私の心に深く響きました。その言葉を聞いて、私は今の自分にできることは震災の記憶を決して風化させないよう次世代に地震や津波の経験をしっかりと伝えていくことだと気がつきました。

現在、私は多賀城高校の災害科学科で学んでいます。「震災の記憶を風化させない」ための具体的な方法について、これから学んでいきたいと思います。

宮城県多賀城高等学校
2年　細井 美桜

「今回の合宿に参加して」

今回の合宿で、私は多賀城市内のまち歩きに参加しました。私は多賀城市出身ですが、改めて被災地としての多賀城市について学ぶことができました。合宿では他県の高校生と交流しましたが、お互い緊張がほぐれると打ち解け合うことができ、交流の輪を広げることができました。

合宿２日目にはワークショップと沢登り活動に参加しました。DIGでは私一人では思いつかないアイディアを教えてもらい、避難行動についてより深く考えることができました。また沢登り活動では断層や土に触れることができ、水害の危険性やその歴史について学ぶことができました。沢登り活動の最後では高い場所から流れの中に飛び込むことができ良い思い出になりました。今後はこの貴重な体験を生かし、防災減災について学んでいきたいと思います。

宮城県多賀城高等学校
2年　村上 真綺

「体験の大切さ」

私が１日目のアイスブレイクで宣言した目標は「山の災害についてよく知る」でした。私はまだ地震による土砂災害の現場を見たことがなかったためです。すると合宿３日目に、築館高校の生徒がガイドをして下さり荒砥沢ダム周辺を見学することができました。二次元で見る教科書ではなく三次元の現場を実際に目にすることで、人間の力の及ばない自然災害の恐ろしさが理解できました。これは普段の教室での学習では理解できない部分でした。この経験から実際に見る、聞く、触れる、ことの大切さを理解しました。築館高校の生徒によるガイドは素晴らしく、同じ２年生の活動とは思えませんでした。練習を重ねたのだとは思いますが、今後の私の目標にもなりました。私は災害科学科において様々な学習を行っています。今回の合宿での経験を生かし、災害について伝える、という情報の発信を行っていきたいと思います。

宮城県多賀城高等学校
1年　新沼 侑晟

「自分にできること」

今回の防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、とても貴重な体験ができました。一番記憶に残っているプログラムは沢登り活動とアクションプランづくりです。沢登り活動では体全体で自然を感じ、自分の手で地層や地形を感じ、アクションプランづくりでは、同じ班になった他の高校生と意見を共有することで新たな発見があり、どちらのプログラムでも有意義な活動を経験することができました。

今回の合宿で得たことを活かし、今後は自分で出来ることにしっかりと取り組んでいきたいと思います。多賀城市には本校の先輩方が設置した津波波高標識が数多くあります。先輩の残した努力の跡を目にして、私も自分の出来ることを見つけ出し行動することで、防災や減災への取り組みをより活性化できるよう積極的に活動していきたいと思います。

宮城県多賀城高等学校
1年　久我 美咲

「合宿に参加して」

今回の合宿を通して、私はコミュニケーション能力の伸長とその他の貴重な経験を手にしました。合宿では全国の中高生が集まり、参加した生徒はみんな顔も名前も知らない人ばかりでした。その中で３日間過ごすためには、自分から積極的にコミュニケーションを図ることが重要でした。私は自分の考えを他の参加者に伝えられるよう努力し、他県の災害や防災活動について知識を得ることができました。それは私にとって、とても大きな収穫となりました。

合宿２日目には沢のぼり活動を行いました。私は「沢に飛び込む」という一生のうちに何度も無いような経験をしました。はじめは恐怖を感じましたが、実際に挑戦してみると思った以上に楽しく、良い思い出となりました。今後は災害科学科で学ぶ生徒として視野を広げ、学習における「気づき」を大切にしながら社会に貢献できる知識を身につけたいと思います。

令和元年度　全国中学生・高校生防災会議
「全国防災ジュニアリーダー育成合宿 東北」参加生徒一覧

学校名	氏名	学年
北海道厚真高等学校	蓮池　柚奈	2
	山口　海梨	2
北海道奥尻高等学校	木元　さくら	3
	白戸　琳	3
	宮本　卓弥	2
岩手県立宮古工業高等学校	大久保　颯	3
	佐々木　駿	3
秋田県立秋田北鷹高等学校	柴田　佑介	3
	藤島　千華	2
福島県立小高産業技術高等学校	福山　大騎	2
東京都立大崎高等学校	古屋　敦健	1
学校法人成城学校成城高等学校	米倉　心之介	2
	小林　大晟	2
新潟県立糸魚川白嶺高等学校	清水　綾乃	1
	古市　朱莉	1
千葉県立館山総合高等学校	伊藤　礼奈	3
	宇井　愛	2
宮城県石巻西高等学校	後藤　亜美	2
	佐藤　晴菜	2
兵庫県立舞子高等学校	冨田　彩翔	3
	佐藤　祐太朗	3
	羅川　尚	3
	磯野　朋花	2
	藤井　大地	2
	森　亮太	1
熊本県立熊本第二高等学校	長濱　勇気	2
	稲留　慎之佑	2
釜石市立釜石東中学校	山﨑　成美	2
	川崎　祐奈	2
気仙沼市立階上中学校	千葉　夏愛	3
多賀城市立東豊中学校	及川　颯太	2
	佐々木　俊輔	2

学校名	氏名	学年
宮城県築館高等学校	鈴木　弾	2
	田代　比奈	2
	佐々木　淳	2
宮城県多賀城高等学校	佐藤　清華	2
	佐藤　美咲	2
	細井　美桜	2
	村上　真綺	2
	新沼　侑晟	1
	久我　美咲	1
宮城県築館高等学校（スタッフ）	千葉　尚大	2
	笠松　萌花	2
	中鉢　紀美恵	2
	大場　美月	2
	佐藤　彩菜	2
	鈴木　陸斗	2
	関村　駿大	2
	阿部　夏季	2
	佐々木　壱倖	2
	佐藤　大空	2
	佐々木　詩菜	2
	鈴木　彩巴	2
	佐藤　愛里	2
宮城県多賀城高等学校（スタッフ）	畑岡　茜音	2
	山田　こころ	2
	箭子　優羽	2
	岩佐　唯花	2
	堀内　海里	2
	工藤　花音	2
	小竹　叶多	2
	宇佐美　直輝	3
	安達　陽	1
	本間　優輔	1

計　17校　64名

熊本会場企画

令和元年度　全国中学生・高校生防災会議
「全国防災ジュニアリーダー育成合宿 熊本」実施要項

❶ 日　程：令和元年11月15日（金）～17日（日）　２泊３日
　　※熊本県外参加校は11月14 日（木）から
❷ 会　場：国立阿蘇青少年交流の家、阿蘇火山博物館、立野ダム、高野台地区、
　　旧長陽西部小学校、熊本城
❸ 主　催：独立行政法人　国立青少年教育振興機構
❹ 主　管：熊本県立第二高等学校、国立阿蘇青少年交流の家
❺ 特別協力：公益財団法人　上廣倫理財団
❻ 後　援：熊本県、阿蘇市、益城町、南阿蘇村、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、
　　益城町教育委員会
❼ 参加者：75名（中学生９名、高校生41名、教員25名）
❽ 参加校　20校

熊本県内（10校）
・熊本県立東稜高等学校　・熊本県立熊本工業高等学校
・熊本県立高森高等学校　・熊本県立第二高等学校
・熊本県立菊池農業高等学校　・熊本県立阿蘇中央高等学校
・南阿蘇村立南阿蘇中学校　・益城町立木山中学校
・熊本市立東野中学校　・阿蘇市立一の宮中学校

熊本県外（10校）
・宮城県多賀城高等学校　・京都府立東稜高等学校
・岡山県立真庭高等学校　・高知県立大方高等学校
・高知県立須崎総合高等学校　・兵庫県立舞子高等学校
・兵庫県立松陽高等学校　・神戸市立神港橘高等学校
・大分県立佐伯鶴城高等学校　・宮崎県立福島高等学校

❾ 内　容

◆11月14日（木）［県外からの参加者対象］
14:30　熊本駅集合
16:30　阿蘇火山博物館見学
18:30　阿蘇青少年交流の家着
18:45　夕食
20:00　交流タイム
21:00　入浴、就寝

◆11月15日（金）
6:30　起床、朝食
9:00　立野被災地の見学／復興弁当
11:00　復興弁当とおばちゃんの話
12:00　昼食　［県内からの参加者合流］
13:00　開講式
13:30　交流タイム　ポスターセッション①
　　※各校の取り組み紹介
15:00　講話
　　「熊本地震から学ぶ自然災害との付き合い方」
17:00　講演「災害…浮かび上がる暮らしの課題
　　～熊本地震と現代社会～」
18:00　夕食
19:00　交流タイム　ポスターセッション②
　　※各校の取り組み紹介
19:30　今日の振り返り
20:30　入浴、就寝

◆11月16日（土）
6:30　起床、朝食
9:00　講話「自然と共に生きる
　　～熊本地震を体験して～」
9:30　講話「熊本地震から３年半
　　私たちが伝えたいこと」
10:15　防災講演「未来につなげ！熊本地震の教訓
　　～リーダーとなるみなさんへ
　　未来に向けてのメッセージ～」
11:15　昼食
12:15　ワークショップ①「災害と向き合う」
14:15　ワークショップ②「災間を生きる君たちへ
　　～避難所運営と子どもの力～」
16:15　ポスター制作
17:30　夕食
18:45　ポスター発表
20:00　フリータイム
21:30　入浴、就寝

◆11月17日（日）
6:00　起床、朝食
8:45　熊本城見学
10:30　閉講式
11:00　解散

阿蘇火山博物館の見学

講　　師

館　長　**池辺 伸一郎** 氏
学芸員　**豊村 克則** 氏

執筆担当者

神戸市立神港橘高等学校　**小宮 丈昇**

◆ 活動内容

【入口】
入口には現在の阿蘇山の火口の音が流されていると教えていただきました。

【地球・九州展示　ジオラマ】
中では阿蘇火山のことだけでなく、地球の仕組みや本物の隕石も展示してありました。また、阿蘇火山誕生の動くジオラマがあり、成り立ちがよくわかりました。

【阿蘇火山展示】
阿蘇火山が大昔に実際に噴火した時のアニメーションが流されていました。また今現在の阿蘇火山の様子を映しているカメラ映像が流されており、火山カメラの仕組みの模型も展示してあり、火山の噴火の仕組みや、噴火した際の九州への影響なども深く考える機会になりました。

執筆担当者

神戸市立神港橘高等学校　**小宮 丈昇**

◆ 感じたこと／学んだこと

僕は今回の火山博物館の見学で、火山の噴火の仕組みや阿蘇火山が噴火することで九州に出る影響などについて深く考えて学ぶことができました。

博物館の前には阿蘇中岳があり、まさに噴火している真っ最中でした。僕は噴火している火山を実際に見たのは初めてだったので、地球の力に圧倒されました。博物館の中にはいり、展示物を館長の池辺さんに案内していただき、阿蘇中岳の噴火のメカニズムや過去に起きた噴火だけでなく地球や九州の成り立ち、また日本全国の火山や宇宙の火山の展示もありました。それらの展示をみて、僕は今まで地震のことについて深く考えてきましたが、火山の噴火も災害なのだということを再確認できました。

火山博物館の学芸員の豊村さんのお話を聞いて、今まであまり知識のなかった火山災害についてわかりやすくお話していただき、より深く理解できました。豊村さんのお話の中で「人の生活に影響が出たら初めて自然現象が災害になる。」という言葉がとても印象に残りました。その言葉で災害というと地震や水害を思い浮かべるけれど、デマなども災害なのだということも学びました。

立野被災地見学（立野ダム、高野台）

講　　師

熊本大学 特任准教授　**鳥井 真之** 氏

執筆担当者

宮城県多賀城高等学校　**本間 優輔、櫻井 乃綾**

◆ 活動内容

【立野ダム】

阿蘇カルデラに入った雨は立野火口瀬に溜まり傾斜が急な地形を流下して、熊本市外部に達する。そのため熊本では大規模な洪水や土砂崩れが頻繁に起きているようだ。そのため、白川沿いの浸水を防ぐ事を目的とした洪水調整専用ダム立野ダムが作られました。このダムは湖隋被害の防止また、軽減の役割を持っている。平成24年の九州大豪雨について、河川整備計画である、立野ダム、黒川遊水地群、堤防や河道の掘削が完了していた場合、河川水位を大幅に低減させることができたと推算されていたそうだ。また、立野ダムのみだったとしてもかなりの被害の低減が見込まれていた。

【高野台】

平成28年の本震動により、南阿蘇村周辺で数多くの斜面崩壊や地滑りなどが発生した。これらは、立野大規模地震崩壊と呼ばれている。見学した場所の近くには、５万年前に噴火したとされている火山もあったそうだが、周辺火山の火山灰が降り積もり見えなくなっていた。熊本地震の際はこの地盤のしっかりしていない火山灰の地層が地震により斜面崩壊を起こし、５名の方の命を奪ってしまったそうだ。この付近の分譲地は、レッドゾーン（危険区域）となっていて、土砂崩れの危険がわかっていたのに、何も対応できなかったのは、問題だと思われる。この問題は日本のどの地域でも見ることが出来るそうだ。調べてみると、私たちの地域にも存在していたため、積極的に周知して行く必要があると考えさせられた。

執筆担当者

岡山県立真庭高等学校　**本多 礼緒奈、鷲須 友樹**

◆ 感じたこと／学んだこと

立野被災地そして高野台、三年前に発生した熊本地震の爪痕は想像を絶する姿でした。立野で布田川断層のズレを直接確認して、地震の強さを改めて感じることができました。そもそも立野は地形の関係上、雨水が集まりやすく洪水の被害が度々あるそうです。ダムは水を溜め、人々の生活を助けるだけでなく様々な用途があることを知りました。高野台を見た時、土砂崩れがあったと聞いてはいましたが、何も不思議に思いませんでした。ところが、鳥井先生の説明を聞き改めて違和感を覚えました。それを物語るかのように、地中に埋没していたパイプが折れ曲がり、地表に露出していたのです。この場所で５人もの方がお亡くなりになられたことも知り、思わず固唾を飲み、自分が住んでいる所は大丈夫なのか、心配になりました。

このフィールドワークを通して、「命を守り、家を守ること」の大きな責任と、改めて私たちが住んでいる地域にはどんなリスクがあるのか、そのリスクに対して今すべきことは何なのか、自然とどのように生活していくのか、考えることができました。

復興弁当とおばちゃんの話

講　　師

すがるの里　**渡辺 ヒロ子** 氏

執筆担当者

京都府立東稜高等学校　**江口 竜ノ介、片岡　奨**

◆ 活動内容

長陽西部小学校跡地にてこの日の昼食である復興弁当をいただいた。

復興弁当は南阿蘇村黒川地区の女性団体「すがるの里」が農場実習に通う東海大生の支援をしようと始めたものである。黒川地区は、震災前までは東海大阿蘇キャンパスに通う学生の下宿先として約800名の学生が生活していた「学生村」と呼ばれた地域である。

この日のメニューはチキン南蛮と肉巻きをメインとし、健康にも気をつかって、地元の新鮮な野菜も入っていた。「手作りにこだわり、おなかいっぱい食べてもらい、笑顔が広がるとうれしい。それが地域や私たちの元気にもつながる」という思いでつくられた弁当は「おばあちゃんの味がする」と好評だった。500円とは思えない味わいの弁当だった。

食後、弁当を作っている「すがるの里」の代表、渡辺ヒロ子さんの話を聴いた。「命は自分１人の命ではない。お母さん、お父さん、また友達の命でもある。」と震災を通して感じた命の大切さを語っていただいた。

執筆担当者

兵庫県立舞子高等学校　**青木 翔佑、大澤 太希、松原 陽向、三好 彩香**

◆ 感じたこと／学んだこと

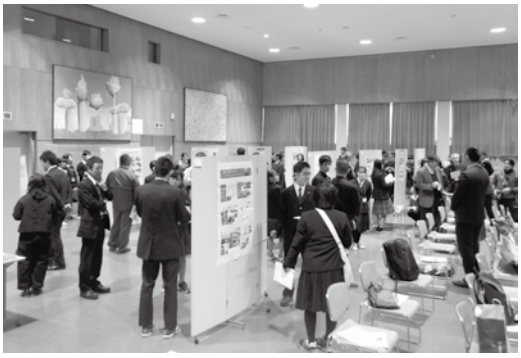
南阿蘇村黒川地区は、かつて東海大学農学部の学生が800人以上暮らしていた。熊本地震で多くの下宿が壊れ学生３名が亡くなった。地震後、学生は熊本市内のキャンパスに移り、地域の活力が失われた。2019年４月、元は下宿を営んでいた女性達が「すがるの里」を結成し、実習に来る学生や視察に訪れる人々に振る舞う弁当づくりを始めた。会長の渡辺ヒロ子さんは「地震で住まいは全壊したけれども命は助かった。命があったら何でもできる」「災害時は自分の身をしっかり守ってから周りの人を助けて欲しい。自分は大丈夫だと思わないでほしい」と話して下さった。

皆と集まっておしゃべりをしながら弁当を作ることによって、元気を取り戻した人もいるという。

活動拠点である旧長陽西部小学校には『阿蘇の灯』の三角灯篭もおかれていた。東海大の学生と黒川地区の住民とを繋ぐ交流会で毎年灯されるこの灯篭には、復興への願い、熊本地震を継承する想いが描かれている。

交流タイム

ポスターセッション



講　　師

熊本県立第二高等学校　**高崎 真鶴** 氏

執筆担当者

兵庫県立松陽高等学校　**阿野 伊小里、加藤 優音**

◆ 活動内容

今回の交流タイムでは、各学校が主にどのような活動をしているのかを発信していく時間でした。学校ごとに作ったポスターを持参しており、そのポスターの内容を自分達で他者に上手く伝えていく事が目標のポスターセッションでした。それぞれの学校が防災やボランティアに関して積極的に取り組み活動しており、非常に参考になる発表ばかりでした。

また、県外の学校の発表を聞き、授業でハザードマップを作ったり、国際交流を通して外国の防災知識を学んでいる学校もあったり、防災に向けての見方や新たな取り組みについて学ぶことができました。

また、熊本県阿蘇市で被災された方もおられ、発表の中には熊本地震でどのような被害にあったのか、被災経験を通じて何を学んで感じたのかを詳しく話してくれました。実際に経験した方の話を直接聞くことや年が近い方の考えを聞く機会は少ないのでとても貴重な時間になりました。

執筆担当者

南阿蘇村立南阿蘇中学校　**深澤 寿来、田尻 菜々美**

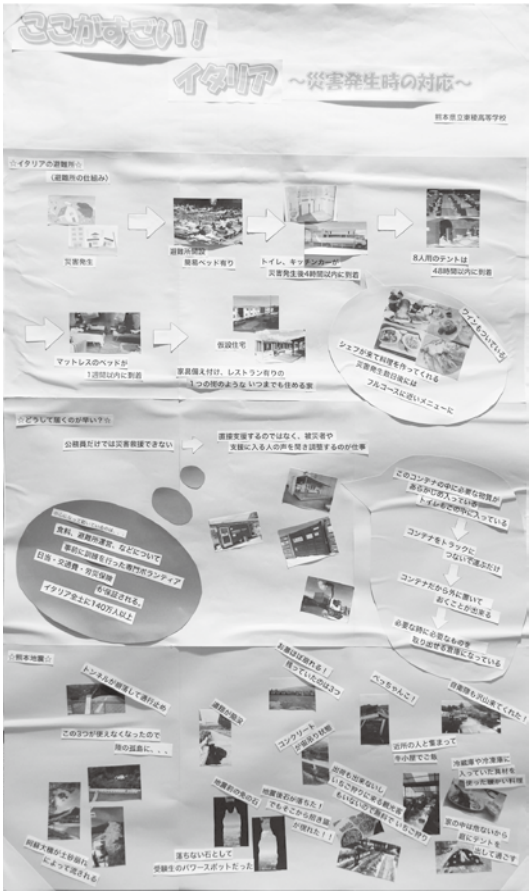
◆ 感じたこと／学んだこと

ポスターセッションでは、他校の様々な取り組みを知ることができました。高校生の発表では、商品開発や海外との交流など、多様な活動をされていて驚きました。中でも印象に残っているのは兵庫県立松陽高等学校が取り組んでいた「松の陽だまりパン」という非常食の商品開発です。これまでは乾パンのように保存性が高いものの、固かったり、味の好みが分かれたりする食品が多かったですが、このパンはしっとりしていてとても食べやすいもので、幅広い世代の方々に受け入れられる工夫をされていました。また、高校には災害科学科という学科があることがとても興味深かったです。

高校は多くの学科があり、中には専門的に防災のことを学ぶための学科があることや、それぞれの学校の学科の特徴を生かした防災学習に取り組んでいることが中学生にとっては新鮮で驚きでした。ポスターセッションを通して各学校の防災意識を高める取り組みを広く知ることができ、学校に持ち帰って全校に伝えていきたいと思います。

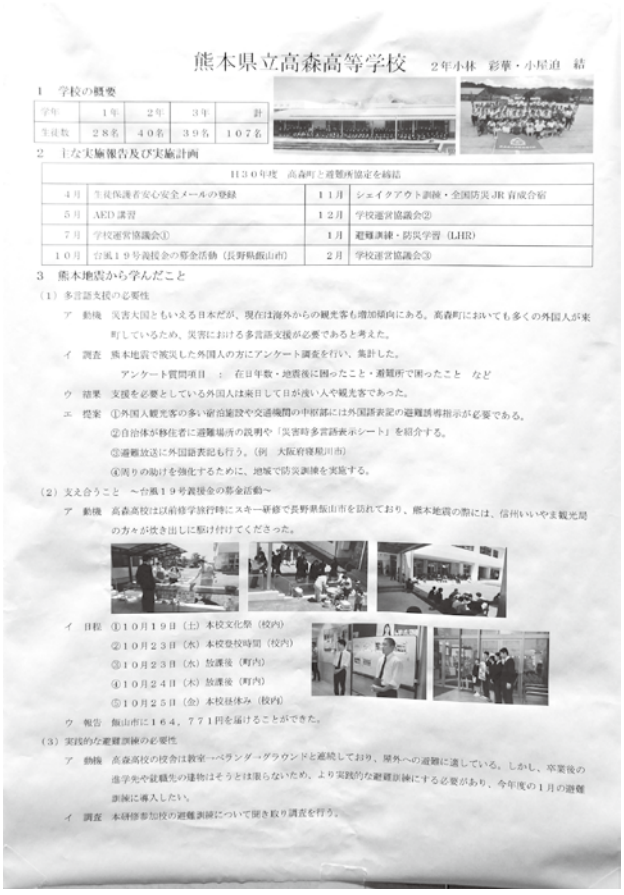
各校作成ポスター

熊本県立東稜高等学校



熊本県立熊本工業高等学校

熊本県立高森高等学校



熊本県立高森高等学校　2年小林　彩華・小屋迫　結

1　学校の概要

学年	1年	2年	3年	計
生徒数	28名	40名	39名	107名

2　主な実施報告及び実施計画

H30年度　高森町と避難所協定を締結			
4月	生徒保護者安心安全メールの登録	11月	シェイクアウト訓練・全国防災・JR育成合宿
5月	AED講習	12月	学校運営協議会②
7月	学校運営協議会①	1月	避難訓練・防災学習（LHR）
10月	台風19号義援金の募金活動（長野県飯山市）	2月	学校運営協議会③

3　熊本地震から学んだこと

（1）多言語支援の必要性

ア　動機　災害大国ともいえる日本だが、現在は海外からの観光客も増加傾向にある。高森町においても多くの外国人が来町しているため、災害における多言語支援が必要であると考えた。

イ　調査　熊本地震で被災した外国人の方にアンケート調査を行い、集計した。

アンケート質問項目　：　在日年数・地震後に困ったこと・避難所で困ったこと　など

ウ　結果　支援を必要としている外国人は来日して日が浅い人や観光客であった。

エ　提案　①外国人観光客の多い宿泊施設や交通機関の中部屋には外国語表記の避難誘導指示が必要である。

②自治体が移住者に避難場所の説明や「災害時多言語表示シート」を紹介する。

③避難放送に外国語表記も行う。（例　大阪府寝屋川市）

④周りの助けを強化するために、地域で防災訓練を実施する。

（2）支え合うこと　～台風19号義援金の募金活動～

ア　動機　高森高校は以前修学旅行時にスキー研修で長野県飯山市を訪れており、熊本地震の際には、信州いいやま観光局の方々が炊き出しに駆け付けてくださった。

イ　日程　①10月19日（土）本校文化祭（校内）

②10月23日（水）本校登校時間（校内）

③10月23日（水）放課後（町内）

④10月24日（木）放課後（町内）

⑤10月25日（金）本校休み（校内）

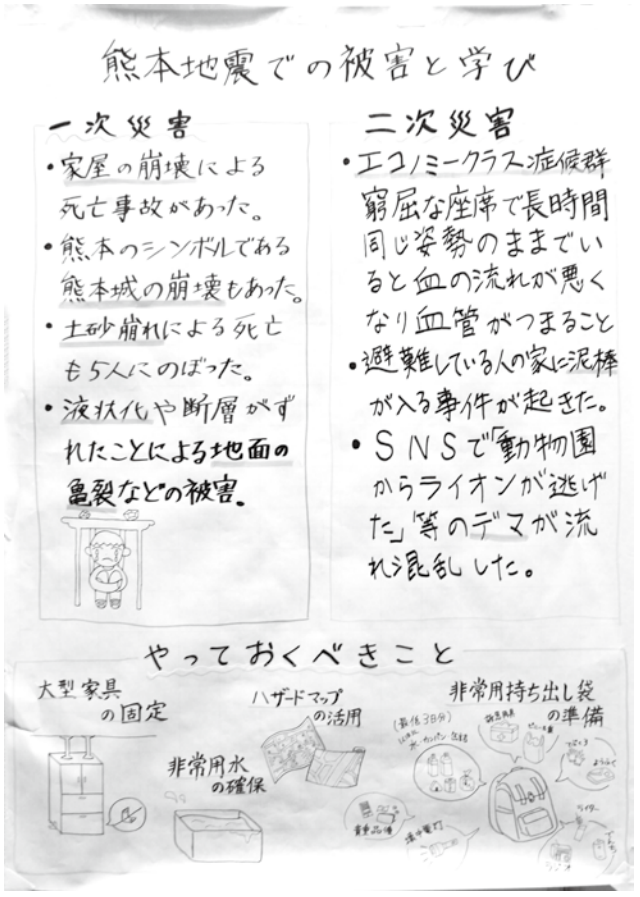
ウ　報告　飯山市に164，771円を届けることができた。

（3）実践的な避難訓練の必要性

ア　動機　高森高校の校舎は教室→ベランダ→グラウンドと連続しており、屋外への避難に適している。しかし、卒業後の進学先や就職先の建物はそうとは限らないため、より実践的な避難訓練にする必要があり、今年度の1月の避難訓練に導入したい。

イ　調査　本研修参加校の避難訓練について聞き取り調査を行う。

熊本県立菊池農業高等学校



熊本県立阿蘇中央高等学校

復旧・復興への取り組み　～熊本地震を通して～

私たちは平成28年4月に熊本地震を経験しました。このような災害から復旧・復興するためには何が大切かを学習しようと思い、阿蘇市が策定した復旧・復興計画を調べてまとめました。

阿蘇市は、震災による復旧を中心としながら、これまでの経験から想定されるあらゆる災害に対応していくための体制づくりを再構築し、人と人、そして地域のつながりを広げ、誰もが安心して暮らせる地域社会の実現を目指すためにこの計画を策定しています。そして、第2次阿蘇市総合計画の中の「誰もが安心して暮らせる生活環境と安定した地域経済の回復に必要な災害からの復旧・復興に関する計画」として位置付け、平成29年度から令和2年度までの4年間、将来都市像の達成に向けて最優先に取り組むとしています。

一日も早い復旧・復興を目指していくための指針として、以下の3つの実施施策を挙げています。

備える

【主な取り組み】

- 防災機能・機能強化・避難時の再開発の機能強化
- 防災機能によるライフライン（電気・水道）復活時の機能
- 高齢者・障がい者・妊婦・外国人観光客・観光客・子育て世代などへの避難時の配慮などの機能

創る

【主な取り組み】

- 社会インフラの復旧・機能強化（道路・河川・橋梁）
- 農林畜産業の復旧等に関する支援
- 国内外からの観光入込客数の回復や多様な人材交流機会の創出強化の強化、など

つなぐ

【主な取り組み】

- 自然環境に配慮した生活再建支援（住宅再建、被災者のケア、自立支援など）
- 阿蘇神社等の有形文化財及び無形文化財（コミュニティ機能の復旧支援）など

今回調べたことで、阿蘇市が熊本地震からの復旧・復興のために尽力してくれていることがよく分かりました。しかし、市などの行政に何でも頼ってしまうのではなく、個人の意識も向上させていかなければいけません。防災グッズを備えたり、近所とのつながりを作ったり、周囲の人に実際に経験したことを伝えたりと、個人でもできることを積極的に取り組むべきです。そのようにして行政も個人も防災対策を行えば、今後起こりうる災害での被害は減るのではないかと私は思いました。

南阿蘇村立南阿蘇中学校

南阿蘇村立南阿蘇中学校

新設４年目の学校

開校一週間で「熊本地震」が…

益城町立木山中学校

未来へ語り継ぐ

1　熊本地震

２０１６年４月１４日４月１６日にかけて震度７の地震が発生。その余震回数は２０１９年１０月１３日までに震度１以上が４,５４４回（阪神・淡路大震災２３０回）にもなりました。震度７の地震が同一地域で連続して発生するのは震度７が設定された１９４９年以降初めてのことです。

	時間	震度	マグニチュード	観測地
4/14（前震）	21:26	7	6.5	益城
4/16（本震）	1:25	7	7.3	益城・西原

2　地震による被害

人的被害

・地震の発生により倒壊した住宅の下敷きになったり、土砂崩れに巻き込まれて亡くなった方もいた。

震災関連死

・避難生活によるストレスや持病の悪化などで亡くなる人も相次いだ。

・地震から避難して車中泊する人が増え窮屈な座席で長時間動かないでいると、足に血栓ができ、いきなり歩くことで血栓が血液と一緒に流れ死亡する方も多くいた。

城南町の被害

・城南町では震度６弱の地震が観測されました。

・築３４年の家は天井や壁が落ち柱も倒れた。

・棚になおしていた物が全部落ちた。

菊陽町の被害と復興

・菊陽町では震度５強の地震が観測されました。

・中学校の壁やはりが落下しました。

・小学校付近の石垣が崩れ一時通行止めになりました。

・役場玄関前の崩落した招魂碑

←神奈川県から送られて来たオルツ

←水とおにぎりの配布

3　明日へ

・私たちが今回の地震で学んだ事は、非常食がとても重要なこと、地震を経験したことを忘れず他人事にしないこと、被災された方々を助けるを思いやる気持ちが大切だと思った。私たちが今まで通りの生活に戻れたのはたくさんの方々の支援があったからなので感謝の気持ちを忘れません。

熊本市立東野中学校

全国防災ジュニアリーダー合宿in阿蘇

熊本地震とそこから学んだこと

令和元年11月15日
熊本市立東野中学校
阪野　倉留　吉住

私たちが通う学校は5月に避難所になり、震源から近い東野中は、避難所となった東野中などに避難したり、公園などで車中のしたりしながら過ごしました。1週間ほどで自宅の片付けなどに取り組んだが、1ヶ月経ち水が通らなかった地区もある。

2016年の熊本地震では、4月14日の前震（震度6弱）16日の本震（震度6強）この2日の地震で大きなダメージを受けた。

学校の周辺も校舎へのダメージはあったが、2度目の本震でさらに被害が大きくなった。

特に、避難所として解放していた教室は、本震によるダメージは深刻で、避難者は体育館へと移転していただいた。ゴールデンウィークまで東野中は避難所として機能した。

連休明けに、学校再開。当初3棟あった校舎のうち、教室棟は0ヵ入り禁止となり、体育館や武道場での授業再開となった。5月末に行われた体育大会。地域に東野中の元気な姿を見せることで、全国からの支援に感謝の気持ちを伝えた。体育大会終了後に、プレハブ校舎の建設及び校舎の取り壊しが始まり、グラウンドが使用できなくなった。

2学期には、プレハブ教室が建てられ、仮設校舎での授業がスタートした。その後、管理棟も取り壊し決定に伴い、全4棟の仮設校舎が建てられた。校舎の取り壊し工事が進み、現在、新校舎の建設が進んでいる。私たちは入学以来、仮設校舎での中学校生活を送っている。

熊本地震の翌年、熊本県立熊本農業学校で実施した体育大会。主催名が「東野再興」を掲げ、全国からの支援に感謝した。

今年は「SMILE」、今年は「風と吹け」のテーマで熊本県立第二高校で行った体育大会。感謝と活力を表現した。

熊本に支えていただいた私たち、東野中学校の伝統を引き継ぐとともに、「私たちだからできること」に取り組んでいきたい。発信していきたい。

12月末に新校舎の完成予定。これからも、東野中生徒は「感謝」の気持ちを忘れず、地域に活力を与えていきたい。

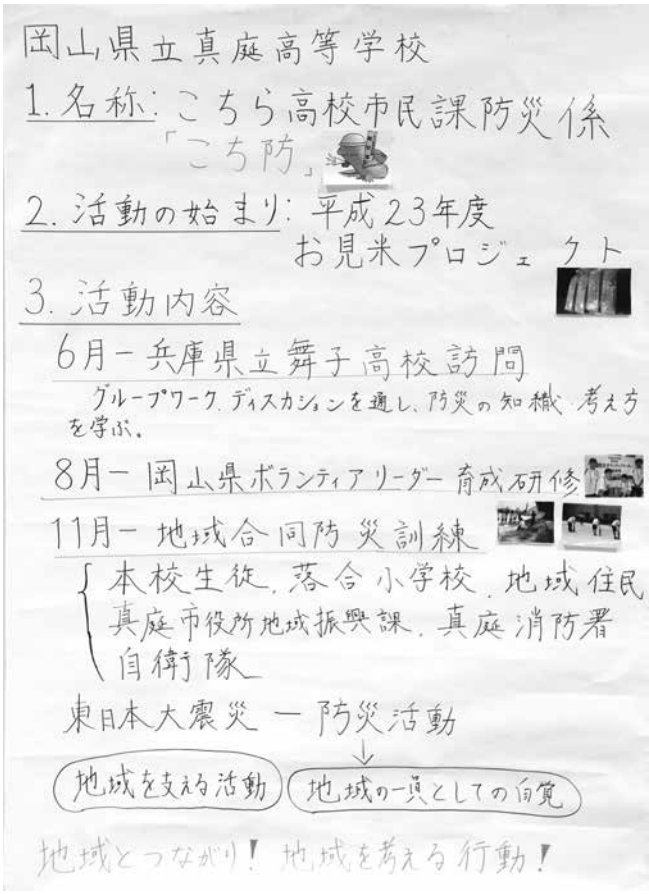
私たち中学生にできることは限られている。でも、今「私たちだからできること」を大切に行動していきます。

阿蘇市立一の宮中学校

宮城県多賀城高等学校

京都府立東稜高等学校

岡山県立真庭高等学校



高知県立大方高等学校

高知県立須崎総合高等学校

兵庫県立舞子高等学校

神戸市立神港橘高等学校

大分県立佐伯鶴城高等学校

佐伯鶴城高校の防災に対する取り組み

大分県立佐伯鶴城高等学校　1年 山内 日和　山田 夏音

SSH関連研修

● 関西科学研修
「人と防災未来センター」訪問
語り部による講話、震災関連の資料
DVDの閲覧
「兵庫県立舞子高等学校」訪問
ステージ発表、ポスター発表の聴講、
ワークショップの実施

● 福島防災研修
「福島県環境創造センター」訪問
原子力発電所の事故の説明、施設内の見学
「福島大学」訪問
被災時の体験談の拝聴、
グループディスカッション、全体発表
「福島県立福島高等学校」訪問
学生40名と意見交流

● SSH米国（ハワイ）海外研修
「米太平洋津波警報センター」訪問
データ分析法・情報活用法の演習
「ハワイ大学マノア校」訪問
講義受講、研究成果の発表、意見交換
「イミロア天文学センター」訪問
デジタル機器を使った講義
「ハワイ・ボルケーノ・ナショナルパーク」
火山と地震の関係の説明、フィールドワーク
「パシフィック・ツナミ・ミュージアム」
津波のメカニズムと防災における工学を
体験的に確認

● 「世界津波の日」高校生サミット
サミット分科会でアクションプランを英語で発表

創生探究（鶴城の探究）

● 1年生 ～探究テーマの決定～
探究班のテーマの例（昨年度）

忍者にならって
ライフジャケットに着目し、身体を水につけないようにするための対策として、忍者が用いる水蜘蛛のような何か乗ることのできるモノを作れないか検討した

津波時の低体温症について
ライフジャケットによって溺死は防げるが、低体温症になる可能性があると知り、水中で人間の体温がどのように下がるのかを知るために実験をおこなった

アルファ米はどの条件が美味しいのか
アルファ米の食べやすさは、気温や水温に左右されるのではないかと考え、特に食べやすい条件を明らかにする

● 2年生 ～探究の深化～
1年次の探究から「自分達に何ができるか」考えるために、佐伯市の職員の方にお話を伺い、非難訓練の参加率や防災ラジオの所持率と住む場所に相関があることが分かった。

住んでいる所	防災意識
海側	高い
山側	低い

「どのように防災意識を上げるか？」を現在探究中
・アンケートの作成？
・津波のシュミレーション作成？
などを計画中

宮崎県立福島高等学校

ふくふく防災プログラム

池島　優香
谷口　美羽

地域創生コース（3年生）

・防災かまどを使った炊き出し訓練や地域の危険個所探索、救命救急講習をしています。
・体験や講習を通し防災に対する知識を身につけ、災害への危機感を高めています。

具体的に・・・

・建設業の方々と協力し昨年と今年の2年間で計8個のかまどを設置しました。
・昨年は、福祉協議会の方々と一緒に火起こし班と、調理班にわかれご飯と豚汁を作りました。

災害のとき自分達がつくった防災かまどが役に立ってほしい

・自衛隊災害復旧体験では、非常食の試食、上着を使った担架作り、倒壊家屋からの救助訓練、実際の救助の際に用いる器具の体験などをしました。

他人事のように思うのはやめたい

生徒会が昨年度…

・宮城県を訪問し、気仙沼向洋高校と「なぜすぐ避難しなかったか」をテーマに防災ワークショップを行いました。
・東日本大震災の際は、放送も入らずに訓練とは状況が全く異なったようです。危機感を強く意識した避難訓練が必要。
・災害時には、高校生が率先して避難所の設置を行ったり、地域の方の話し相手になることが大切になると学びました。

防災士

・取得者は、2年間で
2年生　65人中　29人　45%
3年生　84人中　11人　13%
学校全体215人中　40人　18%
・今年度は串間市から防災士試験の受講料と登録料の全額補助があり、受講者が昨年度から14人増えました。

災害がおきた時大人に頼らず高校生でもできる知識を身につけたい

今後の展望

・危機を察知する力が乏しい。
→周りの変化に気付く意識を高める。
・1年生の防災士がいない。
→募集期間に集会で防災士の魅力について伝える。
・かまどの使い方が分からない。
→12月に親子でかまどを使ったうどん作り、防災プログラムに入れる。
・地域との避難訓練が少ない。
→保育園や自治会との交流を増やす。

兵庫県立松陽高等学校

兵庫県立松陽高等学校
高校生によるSDGs Project team

はじめに【2つの報道】

被災者の存在に気付いて…

仮説
「野菜や果物を使った商品開発ができれば、多くの被災者の方々の体験を改善できるのではないか？」

研究目標
「野菜や果物を使った商品開発で地域を活性化し、多くの被災者の方々を支援していく!!」

地域を活性化するための商品開発を企画

災害食に必要なものコンセプト
①いつでも食べられる（賞味期限が長く、災害時・病気の時でも）
②どこでも食べられる（容器が丈夫で強く、衛生状態が維持できる）
③誰でも食べられる（乳幼児・高齢者の方にも）
④すぐに食べられる（お湯がなくても大丈夫）
⑤美味しく食べられる（これが一番大切）品質高度の特産物を使用

地域と連携した商品開発の実践

(1)産学連携での商品開発

(2)加速劣化試験の実施

災害食の必要性を検証するために…

1. アンケート目的：「はりまパンの味・見栄え・災害食として適切であるか？」について調査する。
2. 調査対象：総合防災訓練参加者
3. 調査方法：質問紙法・インタビュー

アンケートの分析結果

はりまパンの美味しさ・見栄え、そして災害食として食べたいという項目で、被験者の殆どの方々に高い評価をいただくことができました。
また、インタビューでは下記の改善点が出ました。

・喉が詰まるので、水分が欲しい。
・レーズン、くるみ、いちじくを入れてほしい。
・缶詰からパンが出しづらいので、パンを少しかさくして欲しい。

上記の改善点を踏まえて、パンの生地を100gから90gに減らし、しっとり感を出せるように材料の成分を変更し、今後の商品開発に生かすことにしました。

兵庫県立松陽高等学校
高校生によるSDGs Project team

いつくもの課題を乗り越えて・・・

課題1 はりまパンを焼いて、冷めた後に出た水分が缶の底に溜まり、カビが生える原因になっています。

ガス置換の手順

課題2 はりまパンを食べることで「体調が改善する・便秘の解消に効果がある」という文言を商品ラベルに載せることが食品表示法に抵触する可能性がある。

課題3 研究開発費・広告宣伝費の予算をどのように準備するのか？

今後の展望

松の陣だまりパン ローリングストックプロジェクト

講　話

熊本地震から学ぶ 自然災害との付き合い方

講　　師

熊本大学 特任准教授　**鳥井 真之** 氏

執筆担当者

熊本県立熊本工業高等学校　**竹原 ひまり、大坂 蒼一郎**

◆ 要旨

○地震のメカニズム

プレートの移動により岩盤に力が加わることで岩盤が破壊される。このとき破壊面（断層）を境に急激にずれ動くことにより、生じた地面の振動が地震となる。余震とは、その破壊された岩盤の壊れかけの部分がさらに破壊され、起こる地震のことである。また、海で起こる地震では、地殻変動により海底が上下に動くことで津波が発生する。

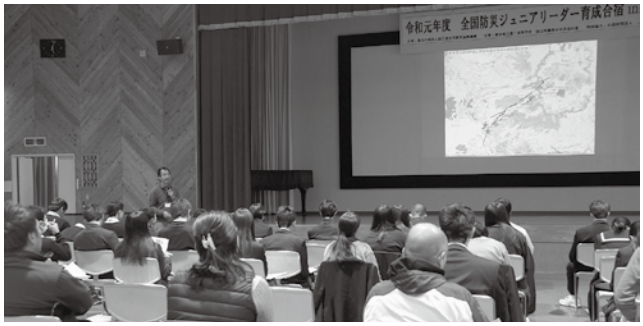
○熊本地震とその被害

布田川断層帯の活動による地震で、被害は地表地震断面、液状化現象、地すべり（表層崩壊）などがあったが、余震で避難した方が多く被害が少なかった。余震は地表面断層より北に多く、断層面は北に下っていることがわかる。また震源が近く、緊急地震警報が役に立たなかったことも特徴と言える。

○自然とのつきあい方

“今までこんなことなかった”ではなく、自分の住んでいる地域はどのような場所なのか、しっかり理解することが必要である。例えば、阿蘇特有の表層崩壊や、崩れては溜まるを繰り返す扇状地、遺跡の断層など。

また西原村では過去50mから100mの沈降が観測されていることから、もっと長い周期で地震のことを考える必要がある。断層が見えている今は地震を研究するチャンスでもある。過去の災害から学び、熊本の自然や地震のことを正しく理解し、その上でハード対策（砂防ダム、堤防、耐震構造など）や、ソフト対策（避難経路の確認、ハザードマップ作りなど）を行い、防災・減災に繋げていくことが大切である。



執筆担当者

熊本県立菊池農業高等学校　**田中 美咲・藤原 彩楽**

◆ 感じたこと／学んだこと

講義を通して多くのことを学びました。その中でも一番心に残ったのは、「どう自然と付き合っていくか、災害に対処していくか」という言葉です。九州では台風が多いため屋根が強い構造になっています。一方、雪が多い地方ではその重みに耐えるため柱は強く、屋根は軽い構造になっています。そのため地震発生時、九州地方は１階が潰れて２階が落ちてくるという被害が多く見られました。雪が多い地方では地震には強いが、台風などの強風には弱い一面があります。熊本地震では耐震設計で建てられた家は、６強の地震で断層が近くても住むことができたことに驚きました。そして今は、「ハード対策」「ソフト対策」「タイムライン」という言葉があるように災害への対策方法がたくさんあることも分かりました。次に起きるかも知れない地震の被害を減らすためにも、熊本地震を経験した私たちが地震のことを忘れている人や未来の新しい私たちの家族に伝えていきたいです。

講　演

災害…浮かび上がる暮らしの課題
～熊本地震と現代社会～

講　　師

熊本日日新聞社編集委員兼論説委員　**小多　　崇** 氏

執筆担当者

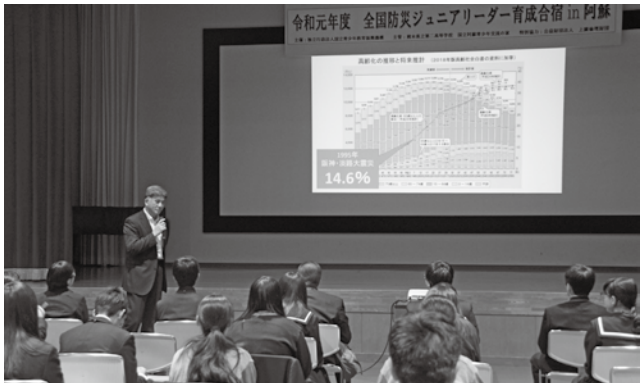
益城町立木山中学校　**服部 孔星、増永 和華**

◆ 要旨

○熊本地震での関連死は直接死の４倍。その真相は社会的課題が関係していた。
○高齢化や貧困率、少子化や単身世帯数の上昇からくる問題。
○軒先避難、車中泊、テント泊、全壊した自宅に残る人…避難の全容がつかめず、支援にむらができてしまっていた。
○避難所、仮設住宅での問題…無知、無関心、誤解、偏見から生まれる「人災」。
○熊本地震を経験し、これらの問題が浮き彫りとなった今、今後に生かせることは何か。私たちが日頃から考え、積み重ねていかなければいけないことは何か。

新聞記者の方の視点から見た、熊本地震で見えた社会的な問題。熊本地震で被災した私たちも知らなかったその時の状況。当時、私たちが暮らす益城町の避難所では、炊き出しや支援物資の配給など沢山の支援をしていただきました。しかし、地域によっては支援物資の配給もなかったところや、障害者への十分な理解がなく、そういった人々を傷つけてしまう出来事など、全ての被災者が十分な支援を受けられたわけではないという事実を、この講義を通し３年経って知ることになりました。

私たち以外の被災者の方々の想い…避難所へ避難した人、避難所に行っても満足な支援を受けられなかった人、倒壊した家でずっと過ごしていた人、それぞれの想いがあったということを忘れてはいけないと思いました。



執筆担当者

熊本県立阿蘇中央高等学校　**福本 裕徳**

◆ 感じたこと／学んだこと

私は、この講演を通して、熊本地震によって浮かび上がった現代社会の課題について学んだ。まずは人口減少と少子高齢化である。熊本地震による災害関連死が直接死の４倍以上で、その多くの方が高齢者で日頃の治療や服薬ができなかったことが原因だということを知り、日頃から災害時も含めて治療や服薬が滞らない支援体制を作る必要があると感じた。しかも人手が少ない状況なのでとても難しい課題である。次に障害者に対する合理的配慮である。食べ物を配給するときに並んだ人にしか渡せないということで障害者の方が受け取れなかった避難所があったことを知り、誰もが障害者に対する理解を深めて寄り添うような社会にしなければならないと感じた。これも難しい課題であるが、私は教員として一人でも多くの生徒に正しい知識や考え方を伝えようと思った。

この講演で取り上げられた課題以外にも、日頃素通りしてしまっている課題の中に災害が起こると大きく降りかかってくる課題があるのではないかと感じた。このような課題の解決に取り組むことも防災の一つだということを学んだ。

被災地体験・語り継ぐ活動

講　　師

阿蘇ジオパークガイド　**広瀬 顕美** 氏
阿蘇の灯 代表　**辻　琴音** 氏

執筆担当者

熊本県立東稜高等学校　**日高 祐貴、亀井 風花**

◆ 要旨

熊本地震を体験した広瀬顕美さんと辻琴音さんの講話が行なわれた。まず、阿蘇に住まれている広瀬さんは益城町で地震が発生したとき、自分の住んでいる地域にはあまり被害がなかったため、「大丈夫だろうか」「私にできることはないだろうか」等他人事のように考えておられたそうだ。しかし、二度目の地震で阿蘇の橋が崩れ、さらには自分の家の近くの旅館が倒壊、旅館の中には人が生き埋めになっている状態で、この時から熊本地震を他人事ではなく自分のことなのだと考えるようになったということだった。地震がおさまって、外に出ると自然と人が寄ってきて、互いの安否を確認したということだった。次の日近くの農家さんが、イチゴやアスパラガスなどを持ってきてくださったおかげで食料には悩まされなかったそうだ。それから、広瀬さんたちは、公的な役割を決め、それぞれがそれぞれの仕事をしていたが、やはり人に頼ってばかりの人がいて、そのような人を自分から行動させるのには苦労したそうだ。広瀬さんはこの体験から、防災グッズの用意、家族との連絡網、避難経路の確保はもちろん、地域の成り立ち等に関心を持つことが大切だと話されていた。

東海大学に通っておられる辻さんは、熊本地震の影響で東海大学からかなり遠いところに避難されたそうだ。地震がおさまって、東海大学の仲間たちとまた会いたいということで呼びかけをされ、無事に再会を果たされたそうだ。それからは、東海大生たちと灯篭を作り、「灯物語」という名前で行ったそうだ。この灯篭には全国から寄せられた復興を願うメッセージが書かれており、訪れた人々は一つ一つのメッセージに見入っておられたとのことだった。

執筆担当者

熊本市立東野中学校　**阪野　雛、倉留 羽花菜、吉住　一**

◆ 感じたこと／学んだこと

今回、２人の語り部さんのお話を聞いて、備えの大切さと地域のつながりの大切さについて知り、語り継ぐことの意味について考えることができた。

私たちは、熊本地震の時には備えをほとんどしていなかったため、食料・水をはじめ、日常生活のすべてのものに困った経験がある。こんな豊かな日本で不安な状況に、自分たちが被災者になるなんて信じられなかった。３年半の時間が過ぎ、記憶も薄れ、災害が他人事のように感じている場面もあった。

広瀬さんの言う、「寄り添ってくれる気持ち」を大切にした活動こそ、被災者に大きな勇気を与えることであることを改めて確認することができた。辻さんの「みんなが繋がれる場所」を大切にしている活動こそ、災害から学んだことを生かす実践であり、語り継ぐ活動の重要性を感じた。また、地域のつながりを普段から築いておけば、体の不自由な方など多くの命を助けることができることも学んだ。

私たちにできること、それは一人でも多くの命が助かるように、日ごろから地域全体の防災意識向上に努めること。そして、今回の講話で学んだことや、自分の思いをみんなに語ることだと思う。そして、人とのつながりを大切にし、笑顔で毎日を過ごすことだと思う。今、できることから実践していきたい。

防災講演

未来につなげ！熊本地震の教訓

～リーダーとなるみなさんへ、未来に向けてのメッセージ～

講　　師

熊本県危機管理 防災特別顧問　**有浦　　隆** 氏

執筆担当者

熊本県立高森高等学校　**小屋迫 結**

◆ 要旨

○熊本地震

消防・自衛隊・警察

⇒約1,714名を救助・搬送

しかし……

直接死50名・関連死220名

⇒直接死は、旧建築法基準の建物での圧迫死

【建物を耐震化する！】

○家庭での防災

①防災情報を入手する癖

②地域の特性を知る

③住宅の耐震化、家具の固定

④非常用品の準備

⑤危険が迫る前の早めの避難

⑥寝る位置などの確認

○災害対策の原則

防災での失敗は命にかかわる!!

【他人事にしないこと】

執筆担当者

阿蘇市立一の宮中学校　**河本 長秀・吉岡 直輝**

◆ 感じたこと／学んだこと

今回の講話では、自分の防災意識を変える多くの言葉に出会うことができました。特に、心に残った言葉が３つあります。１つ目は、「なぜ防災を学ぶのか」ということです。人にとって一番大事なのは命です。その命を守っていくための準備が、日常の危機管理にあると学びました。災害が起こったとき、すぐに避難できる態勢（防災バックの中身はそろっているか、避難訓練は適切に行われているのかなど）が整っているか、私たちでもすぐに確認できることがあると思いました。２つ目は、「自然は恵みにも脅威にもなる」という言葉です。普段から自然や災害に対する理解や覚悟、準備が必要だと改めて感じました。３つ目は「災害を他人事にしないこと」です。過去の災害の歴史に学び、避難訓練を工夫したり、防災マップを新しくしたり、災害に対する備えを改善していく必要があると感じました。これから、「防災での失敗は、命に関わる」という事を忘れず、防災意識を高めていきたいと思います。

ワークショップ①

災害と向き合う

講　　師

神戸学院大学 非常勤講師　**諏訪 清二** 氏

執筆担当者

熊本県立第二高等学校　**長濱 勇気、江上　諒**

◆ 活動内容

【災害体験と向き合う】

東日本大震災では、想定との付き合い方が生死を分けた。「こどもが大人を説得して地域全員で避難できた。」などの成功から学んだ体験や、「想定や対策を十分にできていなかったがためにたくさんの人が家族や友達を亡くした。」などの失敗から学んだ体験を、教訓として語り継いでいくことで、「整理」「断定」「知識」を伝えることが大切だと学んだ。災害から得た教訓から、1人ひとりが防災を学び、同じ失敗を二度と起こさないという気持ちをもって、災害と向き合うということの大切さを学んだ。

【ワークショップの内容】

1.「明日、災害が発生します。今日、何をしますか？」という問いかけに対して以下の①～③を行った。
①すべきだと思うことを10個書き出す
②グループをつくり各々が必要だと思う活動を10個選び優先順位をつける
③選んだ活動を理由とともに発表する
の順に活動を行った。

2.「困りごと、どう解決しよう？」というタイトルで、実際に避難所で起こった問題を、どう解決するか各々が意見を出し合い班でまとめた内容を理由とともに発表した。

最後に、実際にとられた行動を交えた諏訪先生からのお話をいただいた。

執筆担当者

熊本県立第二高等学校　**稲留 慎之佑、金井 俊樹、堀尾 優太郎**

◆ 感じたこと／学んだこと

私たちは、今回のワークショップを通じて、私たちが実際に災害に遭ったときにどのような行動をとればよいのかを深く考えることができました。

災害は、大人でも経験は乏しく、防災を学んだ私たちが、学んでない人に伝えていかないといけないという使命感を強く感じました。また、防災にはハード面とソフト面の対策があり、ハード面での対策には限界があるため、自分たちが災害について知り、備えることは、私たちが思っていた以上に減災に大きな効果があると考えました。

今回のワークショップの中で最も印象に残ったことは、自分が専門としていること、普段からしていることを災害対応に生かすというものです。なぜなら、普段していることを様々な形で応用し、分業すれば、災害対応がより円滑に進み、自身の経験から、災害対応によって復旧もより円滑にすすめることができると強く考えたからです。私たちは、このワークショップで学んだ多くのことを生かして、今後起こるであろう災害で、よりよい備え、よりよい対応ができるようにしたいです。

ワークショップ②

災間を生きる君たちへ
～避難所運営と子どもの力～

講　　師

東北大学 非常勤講師　**齋藤 幸男** 氏

執筆担当者

熊本県立第二高等学校　**大見 歩美香、島田 さくら**

◆ 活動内容

【ワークショップの内容】

４、５人の班に分かれて各班、避難所で必要な役割をそれぞれが考え共有し、模造紙に書き出していった。

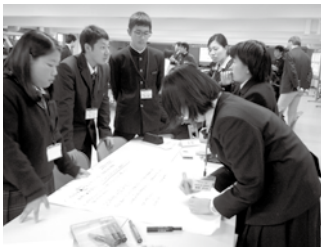
その後代表の班が全体の前で発表をして齋藤先生から「縦の繋がりの強い組織図ではなく横のつながりのウェビング型の組織図が良い」とアドバイスをいただいた。

「被災時に自分が運営側の人間だったらどのように行動するべきなのか」について考えた。

【講演の内容】

東日本大震災時の学校で避難所運営をしている動画を見た。動画ではベテランの教師だけが避難していない様子が映っており経験だけを頼りにしてはいけないと思った。

子供や大人でそれぞれ向いている役割があることを教えてもらった。



執筆担当者

熊本県立第二高等学校　**江口　優、大塚 ひかり**

◆ 感じたこと／学んだこと

「私は生徒がいなかったら倒れていました。」という齋藤先生の言葉がとても印象的でした。以前までの私は自分の地域が被災地となったとき、大人たちを頼っていたかもしれません。しかし、齋藤先生の東日本大震災の時にたくさんの生徒に支えられたというエピソードを聞いて、時には大人の経験だけでは解決できない問題も、子どもの持つ行動力が解決へのカギとなることが分かりました。また被災した時、避難所運営マニュアルは常にあるとは限らず臨機応変に対応しなければなりません。そのためには普段から非常時を想定し、どう行動するかを考えておくべきだと学びました。今回のワークショップでは、その避難所での役割分担の方法や、被災者の持つ様々な問題の解決方法をみんなで話し合い、まとめることができたので、今後周りの人に流布していきたいです。

ワークショップ

全体発表会

講　　師

熊本県立熊本第二高等学校　**高崎 真鶴** 氏

執筆担当者

大分県立佐伯鶴城高等学校　**山内 日和、山田 夏音**

◆ 活動内容

本研修で学んだ防災についての知識を活かすための人生設計を行いました。学生期間、就職して５年後、10年後、さらに20年後という多様な人生プランの中でどのように防災に取り組んでいくかを班で話し合い、発表しました。例えば、建築士という職業においては、学生期間に災害に強い建築物の基礎知識や防災について学び、就職後は災害が起きた際に、災害建築物応急危険度判定ができるようになるという人生設計を行っていました。それぞれの班の発表が終わる度に講師の方々から意見や感想をいただきました。講師の方々からは、現実的な質問や感想、将来の夢に向けて「いま何をしたらよいのか」具体的なアドバイスをいただきました。また､参加した生徒がお互いにアドバイスを行い、より内容を深めていきました。すべての班の発表が終わった後、まとめとして講師の方々から参加者全員にむけて、今後どのように自然と関わっていくかなどのお話や、将来防災リーダーとしてどのように社会と関わっていけばよいかなどのヒントをいただきました。

執筆担当者

宮崎県立福島高等学校　**池島 優香、谷口 美羽**

◆ 感じたこと／学んだこと

今回の発表では、学生時代から老後までの人生設計を立てどのような防災活動ができるかをテーマに話し合い発表した｡それぞれ夢があり、職業によってできる活動が異なることを学べた。特に、熊本県立熊本工業高校の生徒が発表していた人生設計がとてもいいと思った。講義で学んだことを含めながら自分の考えを聞き手にも分かりやすい言葉でまとめており、地震にも対応できる安全な家を設計する建築家になるという強い信念を感じた。

また、兵庫県立舞子高校の生徒は、就きたい職業のことを詳しく理解しており、学生期間は海外の方とも話せるよう英語に力をいれたいと言っていた。自分の人生設計をみんなに発表してくれた方々は、防災に対する意識が高く夢とリーダーとしての取り組みたい活動がまとまっていた。

良い刺激になったので、私達も夢と防災を重ね合わせて自分にしかできないことを探りたい。

熊本城見学

講　　師

熊本大学名誉教授　**山尾 敏孝** 氏

ガ イ ド

熊本第二高等学校　**生徒**

執筆担当者

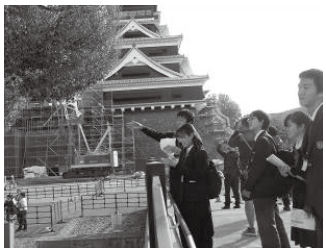
高知県立大方高等学校　**宮川　翔、田辺 真喜**

◆ 活動内容

【西大手門跡】 被災前は、二の丸から本丸へ通じる城の正門として機能していました。地震被害があったため、解体・保管し、崩落した石材を回収しています。石垣前面にネットやぐり石を詰めたカゴなどを施し安全対策をしています。

【宇土櫓】 築城時から存在する櫓です。建物の高さは19メートルあります。熊本地震では漆喰壁や床などが破損しながらも成容を保っています。重要文化財建造物として指定もされています。

【天守閣】 地震被害で、大天守最上階屋根の鯱や瓦が落下しました。建物全体で壁や床のコンクリートに多くのひび割れが生じたそうです。また、小天守内側の石垣はほとんどが崩落し、外面も崩落・変形が多くあったそうです。復旧の歩みとしては、石垣に大天守で791石、小天守で、約2,500石を積みあげたそうです。そのため、外観は被災前の姿に復旧し、内部では耐震補強を取り入れています。最上階からは、熊本市内や遠く阿蘇の山並みを見渡すことができるそうです。また、西側から見た外側はほとんど被害跡が見えず、反りが見事な「武者返し」が健在でした。また、東側からみても屋根瓦が葺き直されており見応えがあります。



執筆担当者

高知県立須崎総合高等学校　**中川 海咲、福井 緋奈乃**

◆ 感じたこと／学んだこと

熊本城は1607年､加藤清正によって建立され、1955年、城の一部が特別史跡に指定され、国指定重要文化財にも登録されました。しかし、過去３度の災害で大きなダメージを受けました。３年半前の熊本地震では、約50か所の石垣が崩落し、国指定重要文化財建造物13棟すべてが被災しています。今回の特別公開では、天守閣までの指定ルートを見学しました。全長242mを誇る長塀や西大手門の瓦礫が散乱している状況や解体された門の展示は、熊本地震の恐ろしさを物語っていました。天守閣も作業中の鉄筋やクレーン車に囲まれており、復興に懸命に取り組んでいることを痛感しました。熊本城全体が完全に再建されるには、今後20年かかる見込みとうかがい、現代建築技術をもってしてもそれだけの歳月が必要な熊本城の立派さに圧倒されると同時に、それだけの建築物を傷つける地震の大きさに恐怖を抱きました。少しずつ再建されていく美しい熊本城を全国・全世界の人々と見守り、地震に負けない社会をつくっていきたいと思いました。

感想文集（熊本）　～合宿の感想や今後の取組について～

宮城県多賀城高等学校
1年　本間 優輔

「熊本ジュニアリーダー育成合宿を通して」

今回の熊本育成合宿では、災害関連死の危険性や、東北地方ではあまり発生することの少ない豪雨による被害についても学ぶことが出来た。震災を経験した方々からのお話は、災害現場その場にいるかのように感じ、自分達の地域と重ね合わせ真剣に考えさせられた。そして、どの方のお話でも自分には共通している部分があるように感じさせられた。それは『災害を他人事と考えてはいけない。常に自分達にも降りかかる可能性があることを考慮しておかねばならない。』ということである。私たちが生きているこの日本は、他国と比べると災害が何度も起こる国だ。過去に発生した災害の被害について忘れることなく、自分たちでできる限りの備えをしていく必要があると思った。

これからは、今回の合宿で学んだことを家族や友人、地域の方々に共有するために積極的に発信活動に取り組んでいきたい。

宮城県多賀城高等学校
1年　櫻井 乃綾

「熊本ジュニアリーダー育成合宿を通して」

この合宿を通して「知る」、「伝える」これらの大切さを体感しました。
「この場所はどのような危険があるのか。」「この場所は過去にどのようなことがあったのか。」などを知るということが、自分の命を守る上でとても重要だと改めて思いました。

そして伝えるということ、それは未来を守るために必要だと強く感じました。災害というものは生きているうちに出会うか出会わないかわからないほど発生頻度が低いのです。だから災害を経験した人達が伝えることが必要であるということ。それはいつか起きてしまう災害で同じ過ちをおかさず被害を最小限に抑える、すなわち未来を守ることが必要だと感じました。

フィールドワーク、講義そして各学校の防災減災への取り組みから学んだ事を元に大震災から学んだ教訓を確実に次世代に伝承するため、まち歩きやDIGのような活動により一層励んでいきたいと思います。

兵庫県立舞子高等学校
1年　三好 彩香

「合宿に参加して」

今回の合宿はすごく新鮮で印象深かったです。私にはこの全国防災ジュニアリーダー合宿に参加した理由が３つあります。１つ目は毎年５月の連休に熊本県に旅行していて、熊本県の災害について勉強したかったから。２つ目は全国の人達と一緒に防災について勉強出来るから。３つ目は、実は熊本地震の直後の連休に２回余震にあいました。その時の余震は震度３で、泊まっていたホテルも車にも被害はなかったので良かったですが、今でもあの時の揺れは大阪北部地震の時より怖かったことを覚えています。それで、発災直後のことを詳しく知りたいと思いました。

合宿中に私には足りないと思ったことが沢山ありました。特に講師の人達からの問いかけに発言する勇気がなかったことが１番の課題です。２日目の講義でやっと発言することは出来ましたが、私はまだまだ発言することが少なかったと思いました。しかし、２日目の最後に行ったポスター発表では合宿で友達になった人から褒めて貰いました。私はすごく励みになりました。これからもこの発表よりもっと上達して、小さい子供でも分かりやすい発表をしていきたいです。

兵庫県立舞子高等学校
2年　松原 陽向

「防災をlinkする」

私はこの熊本で行われた全国ジュニアリーダー育成合宿で講師の方々のお話を聞き、避難所において子供たちの存在の大きさ、また行動力を知りました。

子供たちが避難所となっている小学校で水くみや、そこのトイレ掃除を行っていると、使い方を改めてくれ、考えを受け入れてくれたという事があるように、小学生や私たち若者が行うことに意味があるのだと思いました。また、釜石東中学校の生徒が率先避難をし、小学生、地域の方々が助かったので、地域の方にとって子供たちの存在は大きく、心を動かしやすいということもわかりました。そのため、もし、舞子高校が避難所となった場合、私たちで避難所を作っていくということの大切さを感じました。

広瀬さんの講話で料理を娘にさせているとおっしゃっていたように、日頃から行っていることが災害時に生かされるので、私も災害時に役立てる事を見つけ、防災を日常と関連づけ、取り入れていきたいです。

兵庫県立舞子高等学校
2年　**青木 翔佑**

「熊本合宿で学べたこと」

今回のジュニアリーダー合宿で学んだことは、阿蘇カルデラの地形・成り立ち、熊本地震のメカニズム、被害、課題、現状、命を守るための心構えなど様々です。その中でも「他人事にしない」「若者の力の大きさ」、この二つが自分の中でとても大きな学びでした。災害を「他人ごとにしない」ことはどの講義でも先生方が仰っていたのでとても印象に残っており、災害を自分事と捉えて行動しようと思いました。「若者の力の大きさ」は斎藤幸男先生の避難所運営についてのワークショップで学びました。避難所で学生がトイレ掃除を行うことによって、避難者も運営に参加するようになった等の話を聞いて、自分達の力の大きさやできることの多さを学びました。自分の勉強不足で発言が消極的になってしまった等、学びだけではなく反省点もありました。今回学んだことを自分の中にしっかりとインプットして伝えるだけではなく自分で行動にうつして、自分の周りの人々も動かせるようになろうと思いました。

兵庫県立舞子高等学校
2年　**大澤 太希**

「熊本合宿を終えて」

熊本合宿の３泊４日を通して勉強できたことがたくさんある。１日目と２日目の学習では、阿蘇山がどのように形成されたのか理解できた。火山には危険なイメージを持っていたが、たくさんの恵みももたらしてくれることを知った。熊本大学の鳥井先生の講義や、地震を起こした断層・土砂崩れを起こした場所でのフィールドワークによって、具体的なイメージができた。特に土砂災害の現場はとても緩い坂で、本当にここで土砂崩れが起きたのかと最初は実感がわかなかった。

この合宿でとても印象に残った言葉がある。熊本県危機管理防災特別顧問の有浦先生がおっしゃった「行政は住人を災いなき地におき、災いの前に逃がす。住人は疑わしきを察し、災いの前に逃れる」というものだ。これは予防や早めの行動につながると思う。

合宿を通して学べたことは自分の中で整理し友人や家族に伝えたい。また、合宿で新しくできた友達とはこれからも仲良くしていきたいと思う。

兵庫県立松陽高等学校
1年　**阿野 伊小里**

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿で私が感じたこと」

今回の育成合宿では、様々な方々と防災について話し合い、多くの防災知識を身に付けることができ、自分自身がとても成長することができた合宿でした。その中でも私が一番印象に残っているのは、有浦さんの「自分達は大丈夫、他人事とは思ってはいけない」という言葉でした。今まで、災害や被災された方々の事を他人事とは思わず、積極的に防災に関わってきました。しかし、この言葉を聞いて、これからどのような行動を取れば良いのか、他人事にせずに自分や他の方のために何が出来るのかを学びました。また、実際に被害が起きた立野被災地や熊本城へ行き、当時の状況を知ることができ、貴重な時間を過ごすことができました。この合宿を通して多くの経験をさせていただき、互いを高め合うことが出来た４日間でした。

兵庫県立松陽高等学校
1年　**加藤 優音**

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿で私が感じたこと」

今回の育成合宿はでは各県の学校の人達と防災を学ぶと共に、コミュニケーションを多く取ることができました。一番印象に残っている講話は、諏訪先生の「災害に向き合う」です。防災の知識がなくて行動に移さない人・知識があっても行動に移さない人は両方とも「同じ人」なのです。行動に移している人が少ない現実の中で、これから私たちにできることは「行動に移すこと」です。災害に備えて家具を固定したり、備蓄食を用意したり等、自分でできることはたくさんあります。また、自分が得た知識を家族や友人、地域の方々と共有することも行動に移すことの一つだと思います。私はまだ将来の夢がないのですが、防災の知識をさらに高め、ボランティアに積極的に参加し、社会に貢献したいと思います。

神戸市立
神港橘高等学校
2年　小宮 丈昇

「災害とは」

阿蘇火山博物館で、今まで僕の住んでいる地域では身近ではない火山災害について深く学べました。また、講演の中で豊村さんがおっしゃっていた話が印象に残っています。阿蘇中岳の火口のライブ映像を見た、火山に詳しくない県外の人たちが「阿蘇の火山が危ない」というデマの情報をインターネットに流したそうです。そのことで阿蘇の土地自体には被害は出ませんでしたが経済的被害が出たそうです。これは人間生活に影響が出ているので災害なのだと教えていただき、自然現象＝災害ではないことを学びました。このことを学べたのは大きな収穫だと思っています。こうして自分の中で変わった意識を大切にして、これからの活動でも自分の思っていたことと違うことを取り入れていきたいと思います。

京都府立東稜高等学校
2年　江口 竜ノ介

「様々な視点から考える防災」

今回の全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加させて頂き、多くのことを学ぶことができた。熊本地震を中心に、災害についての話を聴く中で、様々な視点から災害と防災について学ぶことができた。

大学の准教授や講師の方からは、地震の原理などの地学的な視点。被災された方々からは、実体験を元にその方々の思いや、人と心の繋がりという視点。報道者の方からは、その災害に関して報道することや、被災された方々から話を聞く報道者としての視点。このような視点から、それぞれの災害の考え方について学ぶ良い機会だった。

これらを通して、様々な視点から物事を考えて人の力になろうと思った。ボランティアに参加するにしても、支援する側とされる側ではそれぞれの考え方がある。それを分かったうえで人と接しなければ、心から人の力にはなれないと思うので、様々な視点から考える力を活かしていきたいと思う。

この合宿で身に着けた力を活かし様々な視点から考える防災を広めていきたい。

京都府立東稜高等学校
2年　片岡　奨

「次世代に繋ぐため」

今回、初めて合宿に参加し、たくさんの人からたくさんのことを学びました。

この合宿では、一瞬にしてたくさんの人の命が奪われる災害の恐ろしさ。残された人に一生消えない傷を負わせる被災者の気持ち。そして、絶望からまた立ち上がろうとする人の心の強さ。次、災害が来ても被害を最小限に抑えるための対策など様々な事を学ぶことが出来ました。もし、自分が被災者になったら本当に立ち直れるかとても不安な気持ちになりますが、僕と同じ学生は災害が起きた時、たくさんの人の命を救うため様々な活動を行っていました。大人の指示に従い迅速に対応した学生の人たちにとても感動しました。

僕もすぐに行動できる人間になるため、まずは防災士の資格を取りたくさんの経験と知識を活かして、大勢の人の命を助けられる人間になりたいです。これからも防災の知識を高め、僕が次世代の人に知識を与えられるよう頑張ります。

岡山県立真庭高等学校
2年　本多 礼緒奈

「全国ジュニアリーダー育成合宿について」

私がこの防災合宿に参加しようと思ったきっかけは、本校で「こち防」という防災組織の一員として活動していることから、この合宿で防災について学び、真剣に考え、学んだことを「こち防」にいかしていきたいと思ったからです。この合宿で学んだことは２つあります。１つ目は過去にあったことを学び、二度と起こさないことが大切だということ。２つ目は、「伝える」ということの大切さです。防災・減災の大切さを語り継ぐことは、命や絆の大切さを伝えることに繋がることも学びました。まずは、この合宿で学んだ事を校内に伝えるということからしていきたいと思います。この合宿を通して、防災のリーダーになることの責任の重さを痛感すると同時に、今後もさらに防災意識を高め、本校の「こち防」を頑張ろうという気持ちを新たにしました。最後にこの合宿でお世話になった先生方、出会った皆さんに感謝します。

岡山県立真庭高等学校
2年　鷲須 友樹

「全国ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

私は本校で活動している防災組織、「こち防」に参加していることから、防災について興味が湧き、「もっと知ってみたい」そう思ってこの合宿に参加しました。三年前に発生した熊本地震。当時私は、他人事のようにそのニュースを見ていました。しかし、あの時何が起こったのか、どうメディアが伝えたのかなど、今回被災された方々のお話を聞いて、その悲惨さを鮮明に頭に描くことができました。阿蘇には火山の噴火・地震といったリスクがありますが、反対に大きな恵みもあります。阿蘇の人々は、それを理解した上で住み続けておられます。しかし私は自分が住んでいる地域をいまだよく理解していません。ここには何があるから何をしなければならないのか、それを私たちは全力で考え、行動していく必要があると考えました。今回の合宿で学び考えたことを本校の「こち防」で発揮していきます。ありがとうございました。

高知県立
須崎総合高等学校
2年　中川 海咲

「全国ジュニアリーダー合宿を通して」

この合宿を通して一番心に残ったのは、人とつながることの大切さです。避難所運営学習では、縦割りの役割分担は指示待ち時間が多くなり効率が悪いので、横のつながりをもった役割分担のほうが良いと教わりました。連携した役割分担は、困難が生じるたびに対応策をともに話し合い、様々なアイデアや考え方を出し合うことができるからです。また、災害時だけでなく日頃から人とのつながりをもっておくことが、困難を乗り切るときに大きな力になることもわかりました。近いうちに必ず来る南海トラフ巨大地震は、過去最大の被害をもたらすと想定されています。たくさんの語り部さんがお話してくださったように、災害を他人事とせず、自助はもちろん、公助・共助ができるように、防災・減災の正しい知識を家族や周りの人に伝え、率先避難者として自ら判断・行動できるように日々学んでいきたいです。

高知県立
須崎総合高等学校
2年　福井 緋奈乃

「多くの人に知らせたい地震の危険」

私は「今まで地震についてこんなにも知らなかったのだ」と知りました。そして、もっとたくさん知りたいと思うようになりました。高知県は南海トラフ巨大地震発生の危険があるので、私たち自身が危機感をもって災害へ備えをしておくことが大切です。私は、この危機感を今回の合宿を通して真剣に感じることができました。地震が起きる仕組みや、災害による関連死などの間接的な被害を学習し、それらへの対策を考えるにつれ、自分自身の災害対策の少なさを痛感し危機感が増しました。私が知り得た知識を、私の力は小さいけれど多くの人に伝えていきたいです。知ったかぶりをするのではなく、自分にはまだまだ知らないことがあると自覚して学習を続け、知っているだけでなく学んだことを実際に行動に移していきます。自分の命のために、みんなに真剣に地震に向き合って欲しいです。

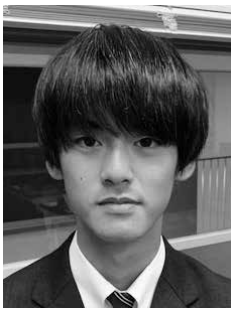
高知県立大方高等学校
1年　宮川　翔

「未来の防災リーダーになる」

私は今回の合宿で、熊本の方々が地震の被害にあって住んでいる町が壊されて、つらい経験をした中で未来に向け前向きに協力していることを知りました。講師の方の話で、その姿を詳しく聞くことができ感動しました。

今回学んだことは多くあり、全国から来ている中高生の皆さんと一緒に災害について考えたり、話し合ったりしました。それぞれの学校で取り組んでいる防災学習も知ることができ、自分たちの学校でも「非常食の開発」などにも着目していきたいです。

私は、将来消防士を目指しています。消防士や自衛隊の方々が、災害時、被災された皆さんを助けている実態を知り、その気持ちがさらに強くなりました。そして今回、多くのことを学び、「人を助ける」ための知識が自分にはまだまだ足りないことを痛感しました。これからも、防災についてさらにしっかりと学び、将来、人を守り、防災で地域を引っ張る存在になりたいです。



高知県立大方高等学校
1年　田辺 真喜

「防災合宿で得たこと」

私は、全国防災ジュニアリーダー育成合宿参加して、様々なことを学ぶ中で人と人との繋がりが大切だという事を実感しました。

今回の合宿で一番心に残ったことは、熊本地震に関する講演・フィールドワークです。自然を理解して付き合うことや自分の命を守るために必要な備えを考えておくことなど、多くのことを学びました。そして、常に防災情報にはアンテナを張っておこう、地域の特性を知っておこう、備蓄品の準備、近隣住民を考慮した準備をしていこうと思いました。

また、この合宿でたくさんの中高生と関われたことも強く印象に残っています。それぞれの学校で取り組んでいる防災学習を情報交換したり、「20年後の自分」について考えたりしましたが、協力して取り組め、交流も深められました。

これらの経験を生かして、防災学習にさらに取り組み、地域のために何ができるのかを考え、行動していきたいです。

大分県立
佐伯鶴城高等学校
1年　山内 日和

「全国ジュニアリーダー育成合宿を通して」

この研修を通じて、私は防災についてたくさんのことを学びました。実際に被災されている方々のお話を聞く機会はなかなか無く、とてもありがたかったです。そして、実際に当時の写真や映像を見ると、とても生々しかったです。被災しているからこそすごく説得力があり話も入ってきやすかったです。そして、被災後の道路や熊本城では地震は現実だったと思わせてくれました。こんなに頑丈なものがこのように崩れてしまうのは本当に衝撃でした。私は何も災害に備えていなかったので、まず防災リュックを準備するところから始めようと思いました。いつ災害が発生するか分からないので、私の住んでいる地域の避難場所を確認し、住んでいる所がどれだけ危ないのかを見たいと思います。防災士にもなるので、このことを生かしながら勉強をしていこうと思いました。

大分県立
佐伯鶴城高等学校
1年　山田 夏音

「ジュニア防災リーダーとして」

私は今回の合宿で、防災についてたくさん学ぶことができました。特に、避難所運営については、生徒である自分自身も力になれることを知って、もし災害が起きたときには、積極的に行動できるようにしようと思いました。また、そのことをまわりの友達にも伝えようと思いました。それに、地震のメカニズムについても学ぶことができ、自然現象に自分自身とどういう関係があるのか考えるきっかけになったのでよかったです。今回の合宿で学んだことを活かして、まず、まわりにいる人たちに防災についてきちんと伝えようと思います。そして、避難訓練だけでなく、実際に災害が起きたことを想定して、避難所運営の訓練もできればよいなと思います。今回の合宿に参加する前よりも、防災についてたくさん学ぶことができてよかったです。それに、防災に対する意識も変わったのでよかったです。

宮崎県立福島高等学校
2年　谷口 美羽

「私のなりたい人間像」

私はこの合宿を通して、過去にあった災害の生々しさを痛感することができました。

実際に、先生や被害にあった方々の話、同級生の話を聞いて、以前にも増して災害について学ぶことができ、自分たちはどうするべきなのかを考えるいい機会になりました。

私が一番印象に残ったのは、学校で事前に作ってきたポスターの発表です。同級生や中学生のまっすぐな思いを知ることができ、なかには開校一週間で地震が起こった学校もあり、熊本地震の悲惨さを改めて実感できました。三年半経った今でも被災前のように暮らせていない方々のためにも、積極的に募金活動をして少しでも復興に向けて力になりたいと考えています。そして、学んだことを周りの人に伝えたいです。

また今後の活動として、防災グッズの作成やワークショップ活動の実施に努めていき、防災士としても、人の命を助けられるように頼りがいのある人間になります。

宮崎県立福島高等学校
2年　池島 優香

「伝えたい」

今回私は、初めて全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加しました。他校の人達がどんな防災活動をしているのか興味もありましたが、防災に対する意識の違いや他校の生徒と上手くコミュニケーションをとれるかなどの不安な気持ちも多くありました。私の通っている福島高校は、他校と比べてあまり活発には防災活動を行っていないので防災士としても自分達にできる取り組みはないか探しました。先生に進められての参加でしたが、避難所での高校生ができる活動などをワークショップ通して深く学ぶことができ貴重な時間になりました。

初めて会う方々や班のみんなと話し合いや活動をしていくことで、防災に対する意識の違いや取り組み方を直接感じることができ、災害に対する意識を見直すことができました。

この合宿で学んだことを無駄にせず、まずは全校生徒に持っている知識を伝えていきたいと思います。

熊本県立東稜高等学校
2年　日高 祐貴

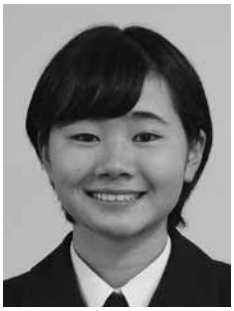
「全国防災リーダー育成合宿を終えて」

私は、全国防災リーダー育成合宿で災害時に役立つことや他校との情報交換などをたくさん行うことができ、有意義な時間を過ごすことができました。活動の中で特に心に残っていることは、二日目に行われたワークショップです。災害について学びながら、自分が災害時の状況にどう対応するのかを班のメンバーと話し合うことができ､楽しく学ぶことができたからです。このことからわたしは、自分の高校でも同じ活動を行い、生徒達に防災について改めて関心を持ってもらいたいと思いました。また、講話以外の時間は他県の高校生たちといろいろな話をすることができました。私と同じ部屋で寝た高校生は他県からの生徒が多くいて、お互いの住む地域について話すことができました。私は今回の全国防災ジュニアリーダー育成合宿で災害時の対策方法、コミュニケーションの大切さを学ぶことができました。これから私は、自分の学校で学んだことを皆に伝え、学校全体で防災に関する活動を行っていきたいと思います。また、私自身は災害ボランティアに積極的に参加し、さらに防災について詳しく学んでいこうと思います。

熊本県立東稜高等学校
2年　亀井 風花

「この合宿で学んだこと」

この合宿に参加するにあたって、私たちの学校は、ポスターセッションでイタリアの防災についてまとめました。鳥井先生や、諏訪先生に補足の説明やアドバイスなどをたくさんもらいました。講師の先生方の話の中で私たちが今考えるべきことは「災害を他人事と思わない」ことだと学びました。ワークショップでは、避難所を運営するにあたって自分たちの行動、トイレ問題など個人や班で考えました。私は、この合宿を通して熊本地震についてさらに深く知ることができました。私は南阿蘇に住んでいるので地震の時自転車や車で阿蘇大橋などを見に行きました｡私は地域に起った出来事や建物など目に見えるものだけを見て｢大変だ｡｣としか思っていなかったけど、小多さんは遺族の方にどんな取材をするか、どうやって伝えるかを必死に試行錯誤されており、目に見えない人の気持ちも考えなくてはならないことを知りました。私たちは1000年に１回という貴重な体験をしました。自分の住んでいる地域がめちゃくちゃになってつらいと思うこともありました。でもたくさんの人が助けてくれました。「自然と共に生きる」私たちは今回聞いた色々な専門家の方々の目線から見た「防災」について私たちが伝えていかないといけないなと思いました。



熊本県立
熊本工業高等学校
3年　竹原 ひまり

「私の人生設計」

今回の防災合宿に参加して、思っていたよりもはるかに私は防災に疎かったのだなと思い知りました。私は先生に勧められるまま、軽い気持ちで参加しました。しかし、すぐに後悔しました。私は参加者の中で最年長でしたが、周りの参加者は真剣に防災と向き合っていたからです。実際に地震を体験した身なのに意識が低いことを恥ずかしく思い、気持ちを入れ替えて学びました。私が合宿で一番心に残っているのは二日目の夜に行われたポスターセッションです。各班代表による自分の人生設計についての発表では、私も班の代表でした。班員といろいろと考えていくと、私が目指している建築設計という仕事は自然災害と密接に関わっていくのだということを再認識し、みんなの前で発表することで、覚悟を決めることができました。育成合宿に参加して、私は確実に成長することができたと思います。今回学んだことを活かして私は将来、人の命を預かる仕事に従事するという覚悟を持って、頑張ろうと思います。

熊本県立
熊本工業高等学校
3年　大坂 蒼一郎

「合宿で学んだこと、そしてこれから」

合宿での沢山の学びの中で、特に二つのことが心に残りました。一つ目は地震への備えについてです。私は熊本地震で避難所生活を経験しましたが、一番困ったのは水と食料でした。最寄りのコンビニの商品は消え去り、自宅マンションは断水と、当たり前の生活が崩れたのを感じました。有浦先生や、諏訪先生の講話では、災害に対する備えや避難のタイミングの大切さを学びました。防災バックの準備やハザードマップの確認など、備える防災に取り組みたいと思います。二つ目は人と人との繋がりの大切さです。斎藤先生の講話では、避難所運営における人間関係や子どもの存在の大きさについての話がありました。私自身も避難所でのボランティアに参加していましたが、食料配布や新聞配達など、大人よりも子供が配ったほうがおじいちゃんおばあちゃんをはじめ、いろんな人が笑顔になっていたことを思い出しました。「子供の笑顔で俺はここまで働けた」。斎藤先生の言葉がとても心に残りました。今回の合宿を活かし、将来は地域の防災リーダーになれるよう、できることから始めていきたいです。

熊本県立
菊池農業高等学校
2年　田中 美咲

「災害の教訓から行動に移すことの大切さ」

今回私は、全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加してたくさんのことを学ぶことができました。参加して思ったことは、日頃の取り組みがいざ地震などがあった時に役立つということです。食事は作ったことがなかったら、お腹が減った時に何も作れず困ってしまいます。日頃から地域で関わりを持っていると、避難した時にあの子がいないと気づき、助かる命があるかもしれません。

また、黒川地区の学生村の話も印象に残りました。そこにはたくさんの学生さんが住んでいました。地震が起きてからは学生が住めなくなり、黒川地区から離れることを余儀なくされました。しかし、学生は諦めませんでした。黒川地区には帰れないがこのままじゃいけないと思った学生は、消えないあかりを灯そうという思いで「阿蘇のあかり」というのを始めたそうです。このままじゃいけないという思いから行動に移すことができたのがすごいと思いました。

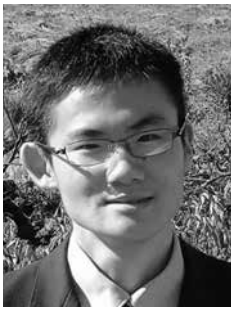
熊本県立
菊池農業高等学校
2年　藤原 彩楽

「学びを次へつなげる」

私はこの全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、他県の防災についての取り組みを知ることができ、次の地震の防災・減災への意識を高めることができました。

本校での防災の取り組みは、主に地域と連携した避難訓練などをしています。他県の方々の取り組みを見ていると「炊き出し訓練」やスマホアプリを使った「逃げトレ」などの訓練をされていて、防災への意識が高いなと感じました。本校は、地域の避難所になっているので、私たちも「炊き出し訓練」などをできるならしてみて、全校あげて行ってみたいです。学校でできたなら、生徒が中心となった「炊き出し訓練」をして地域の方々とも繋がっていきたいです。

この３日間で地震のことや防災・減災について多くのことを学びました。この学びを生かして、私たちがリーダーとなって皆を引っ張れる存在になっていきたいと思います。



熊本県立
阿蘇中央高等学校
2年　宮内 蒼馬

「合宿を通して学んだこと」

私は、今回の合宿を通して、とても貴重な経験を得ることができました。ポスターセッションや講演、ワークショップ、ポスター制作など様々な活動がありましたが、私にとってはポスターセッションが一番良かったです。それは、他校の人が制作したポスターからたくさんのことを学び、色々な視点に気づくことができたからです。個人的に一番良いポスターだと感じたのは熊本県立東稜高等学校のポスターでした。イタリアで起こったとある地震後の対応について調べてあり、災害後に配給される温かい料理、早急に届く救援物資、災害関連死０などを見てイタリア政府の対応や民間人の意識の高さがわかり、外国から防災について学ぶことも大切だと感じました。

その他の活動でもたくさんのことを学び、防災の知識を深めることができました。そして、その知識をアウトプットすることの大切さを学びました。今回の合宿を通して学んだことを家族や友人に伝えていこうと思います。

熊本県立高森高等学校
2年　小屋迫 結

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

この合宿を通して改めて防災の大切さを知ることができました。「自分の命は自分で守る！」ということは当然だと思いますが、日ごろから防災の意識を持っていなければ、「その時」に「自分の命は自分で守る！」ための的確な行動をとることは難しいと感じました。

私は熊本地震で被災しましたが、自宅が倒壊したり、長期間水や電気などのライフラインが寸断されることもなく、正直なところ、どこか災害について他人事のように考えていたかもしれません。しかし、合宿を通して、決して他人事ではないという強い危機感を持ちました。これをきっかけにこれまで以上に防災と向き合い、防災ジュニアリーダーとして家族や友人に防災の大切さについて伝えていきたいと思いました。

益城町立木山中学校
2年　服部 孔星

「防災を学んだ３日間」

僕は、この全国防災ジュニアリーダ育成合宿を通し、他校の災害などへの取り組みなどを聞き、自分たちの学校で活用できそうなことをたくさん学びました。

この合宿で、自分の中で大切だと思ったことがいくつかあります。それは、ソフト対策をしっかりすることや、自分の家周辺の防災マップを確認しておくことです。まだ自分にもこのような取り組みが十分にできていないと思うので、これからも防災に関する勉強ができたらと思います。

また、合宿で学んだたくさんのことを含め、被災者の想いや、有効的な防災対策を少しでも多くの人に知ってもらえるように、しっかりした知識が伝えられるように頑張っていきたいと思います。

益城町立木山中学校
2年　増永 和華

「合宿で学んだこと」

避難所の支援に頼り過ぎてはいけない。避難所は、本当に困っている人が頼れるようにあるべきだ。私が今回の講話を聞いて思ったことです。

私たちは、３年前の熊本地震が起こった当時、たくさんの支援をしていただきました。しかし、支援される人の中に、避難所などでルールを守らない人がいると、そこでのルールが厳しく細かくなります。すると、小多さんのお話にあったように、事情があってお弁当が２つ必要な人が、ルールで弾かれるようになります。ある人のわがままで、他の人がしなくていい我慢をすることになります。

このことから、私は普段からルールをしっかり守って、困っている人に寄り添うことも、防災の１つになると思いました。非常時に対応できるように、普段の生活から気を付けたいと思います。

熊本市立東野中学校
2年　阪野　雛

「語り継ぐ活動を大切に」

今回、初めて全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、周りがほとんど高校生ばかりで、驚きと不安と緊張の中で合宿が始まりました。

合宿を通して、地域の特性を把握し、危険な場所や考えられる災害について前もって話をしておくことが大切だと学びました。想定外のことが起こるのが災害、どうやったら自分の命を守れるのか自分で考えることを大切したいと思います。私は今、生徒会長をしています。しかし、学校にいるときに災害が起こってしまったら、と考えると不安です。

災害はどこでいつ起きてもおかしくありません。「いつかやろう」と思っているとやらないままその日を迎えてしまうことになるでしょう。私たちが体験した熊本地震の記憶はつらいものが多いですが、そこから学んだことや支援していただいた感謝の気持ちなど、忘れていけないものがたくさんあります。自分たちの経験を確認し、伝えていくことも大切なことだと学びました。

東野中は12月に新校舎が完成します。地震の爪痕が薄れますが、そこから学んだ経験を語り継いでいくことで、地域の防災意識を向上していきたいと思います。

熊本市立東野中学校
2年　倉留 羽花菜

「できることから発信」

私は、全国防災ジュニアリーダーの研修に参加し、たくさんのことを学びました。

特に「誰かがやったことが命の救いになる」ということが心に残っています。誰かが何気なく、周りの人のためにやったことが、ほんの少しのことでも命を救うことができるのは、すごく素晴らしいことだと思い、ほんの少しの行動を大切にしていきたいと思います。 また、「子供はいるだけでも周りの人にいい影響を与える」ことや、「家族と子孫をなくす、考え方をやめる」など、すごく心に残りました。

この研修を終えて、私は来た時よりも防災についての知識を増やすことができました。私たちが経験した熊本地震についても、３年前の話だから。と軽く考えるのではなく、あの時の怖さや、あの時の状況、どうすれば命を守れるかなど、学んだことをもっと学校全体に広げ、地域にも広げていきたいと思います。

熊本市立東野中学校
2年　吉住　一

「災害を通して分かり合える社会に」

僕は今回、全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、災害の恐ろしさや備えの大切さを感じました。熊本地震の前も後も、この合宿に参加するまでは、とても防災意識が低くて、「多分どうにかなる」ぐらいの気持ちでした。しかし、この合宿で、その安易な考え方が命取りになってしまうことを学びました。

たくさんあった講話の中でも、「平等と公平」という小多先生の言葉が心に残っています。「平等」を取れば「公平」に欠ける。「公平」を取れば「平等」に欠ける。でも、それは、人々の配慮の足りなさや、社会的弱者への理解の無さからくるものだと思います。それが熊本地震などの災害では浮き彫りとなることを学びました。

僕はもし災害が起こったとしても、その後のトラブルを減らす行動がしたいと思いました。まずは、学校や地域から様々な問題に対しての関心・理解を深めていこうと思います。そして、少しでも傷つく人を減らす活動を実践していきます。

南阿蘇村立
南阿蘇中学校
3年　田尻 菜々美

「合宿を通したたくさんの学びや気づき」

７人の先生方の講話では、様々な角度から防災についての見方があることがわかりました。

鳥井先生の講話では、自分の住んでいる村なのに知らなかった南阿蘇の地形や断層の事、災害危険区域、地層や地質のことを学びました。小多先生の講話では、記者から見た熊本地震当時の状況を知ることができました。私たちは熊本地震の際に支援物資が届きましたが、指定避難所以外には支援が行き届かなかったことがあったことを知りました。また、熊本地震で多くの命が奪われましたが、直接死よりも間接死の方が多かったことに驚きました。地震の揺れが収まってもなお、ストレスやエコノミークラス症候群の恐怖が襲っていたことに改めて気づかされました。

私はこの合宿で、防災リーダーとして何をしなければならないかを学ぶことができました。学校の防災学習で学んだことを全校生徒に伝えたり、地域に広げて南阿蘇村を災害に強い村にしていけるように頑張ります。

南阿蘇村立
南阿蘇中学校
3年　深澤 寿来

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、まず「人は自然の力に勝てないからそれなりの備えをしていくことが大事である。」ということが一番印象に残っています。この合宿では、３日間で約９時間半の講話を聴いたり、ワークショップをしたりしたことによって、どのような備えが必要か知ることができました。また、諏訪先生の講話の中で、「災害はとてもつらいものだけど、災害と向き合うことによって災害について正しい知識を身につけることができる。」と話されていたことが印象に残っています。僕たちは学校で避難所運営訓練を中心とした防災学習に取り組んでいます。特に今年は運営者として活動するので、避難者に対してどのような配慮をすればよいかということを考えながら取り組んでいきたいと思います。今回の合宿を終えて、僕はこれから先、ないほうがいいけれど、もし災害に出会うことがあったら、自分から率先してボランティア活動に取り組んでいきたいと思います。

阿蘇市立一の宮中学校
2年　河本 長秀

「防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

私は、今回初めて全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して、防災の知識を沢山学びました。特に心に残っているのは、鳥井先生がおっしゃっていた「自然との共生」です。災害で被害に遭われた方の多くは、土地に関する知識や住んでいる場所の歴史に関する知識がない場合が多いそうです。私も熊本地震で被災するまで、自分が住んでいる土地やその歴史については知りませんでした。災害から命を守るには、自然のことを知り、災害が起こる前から予想して対策をしておくことが大切だと学びました。また、有浦先生からは災害への対策に関することを学びました。災害は、いつ起こるか分かりません。家具を固定したり、家族一人一人の防災リュックを玄関などすぐ持ち出せるところに置いたりしておこうと思いました。

今回学んだ知識を生かして災害に備え、防災リーダーとして他の人にも防災に関する知識を伝えていきたいです。そして、その人たちから家族や周りの人への知識が広まっていったらいいなと思います。

阿蘇市立一の宮中学校
2年　吉岡 直輝

「防災について学んだこと」

私は、今回初めて全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加しました。そして、防災について様々な面からたくさんのことを学ぶことができました。普段では関わることができない他県の高校生との意見交換や話し合いなどは、とても貴重な体験となりました。また、多くの講師の方の講義も心に残るお話ばかりでした。その中でも有浦隆先生のお話を聞いて、普段の暮らしの中では知ることができないようなことを教えていただきました。「自然は、恵みにも脅威にもなる。だから、災害に対する覚悟と準備が必要。」というお話を聞き、自分の考えを改めさせられました。また、災害対応の原則で「他人事にしない」という言葉を聞き、今までどこか他人事にしていたことが多かった自分を振り返り、これからは自分事として災害について向き合っていこうと思うようになりました。今後、学校でも今回学んだことを広め、多くの人の力になれるよう頑張っていこうと思います。

熊本県立
熊本第二高等学校
2年　江上　諒

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿を通して」

今回の全国防災ジュニアリーダー育成合宿を通して、４日間１班の班長として、班員をまとめることで成長できたと思う。また、災害時に自分たちがどう動けばいいのか、どういう視点で行動を起こせば良いのかなどを、沢山の講話や講演、ワークショップなどを通して学習できてよかった。災害とは何なのか、何が起こるか分からない自然災害とどう向き合うのか、一人一人が知識を身につけ、事前に計画などを立てておくことが重要であると分かったので、その事を周りに発信したいと思った。

熊本県立
熊本第二高等学校
2年　髙瀬 裕展

「合宿に参加して気づいたこと」

僕は今回の防災ジュニア合宿を受けて自分の防災に対する意識のなさに気づくことができました。約４年前の熊本地震で大きな被害を受けたにもかかわらず、自分は無事だったから大丈夫だということを思って終わりではなくて、その経験から今後はどうするべきなのかまた、周りの人にその経験をどう伝えていくのかについての考えが甘かったというのがよくわかりました。僕は前回の熊本地震の前もその被害を受けた後もハザードマップの確認や、避難の時にもっていくリュックなどの用意をしていなかったけれど、今回たくさんの講話を聞いて、それらを忘れずにやっておかなければ自分たちが危険な目にあってしまうということがよくわかりました。これからはこの貴重な経験を生かして自分が災害の被害にあったとしても冷静に対処できるような準備を忘れずに行っていき、家族や周りの友達に防災について伝えることができるようにがんばりたいと思いました。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　**金井 俊樹**

「防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

この防災リーダー育成合宿はとても良い経験になりました。学習面では、防災についてとても詳しく知ることができました。これから先自然災害は確実に起きるから、この知識を忘れることなく多くの人に伝えていきたいと思いました。交流面では、他県の人とも仲良くなることができ多くの貴重な友人を作ることができ、とても良かったです。絶対にこの縁を切ることなく、これからも積極的に交流していきたいです。 この合宿は私のこれからの人生に大きな影響になると思います。だからこれからも今回のようなイベントがあれば、積極的に取り組み、自分の糧にしていきたいです。私は将来実家の寺を継ごうと思っており、このような経験はとても役に立つと考えています。どんな小さなことでも将来に繋げていきたいと思います。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　**堀尾 優太郎**

「合宿を通して考えることができたこと」

今回の合宿を通じて、自然現象と向き合うということを深く考えることができた。災害対策には、国や地方自治体がしているものもあるが、やはり一番大切なことは、私たちが自然現象やそれがもたらす災害のことをきちんと理解し、備えていくことであると改めて感じた。僕は、東日本大震災も茨城で経験し、避難所などの災害対応なども間近に見て、携わってきたが、それでも今回の合宿で教えてもらったものは、知らないことのほうが多く、講義などを通じて当時を思い出し、「あの時はこうすべきだったのだな」と思うことが多くあった。また、今回の合宿の内容を自分たちだけのものにするのではなく、多くの人に伝えることも重要なことであり、防災について学んだ私たちが果たすべき使命だと感じた。そして、実際に災害に遭ったときには、今回学んだことを生かして、リーダーとして活躍できるようにしたいと強く思った。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　**河原 希歩**

「合宿を経て、考えることができたこと」

今回の合宿を経て、私は多くのことを考えることができました。

ポスターセッションでは、多くの活動を知ることができました。防災グッズを開発している学校や、地域の方々がどうしたら防災に意識を持つのかを考えている学校など、「自分たちにできること」を日々考えている点を私たちの学校にも取り入れていくべき点だと感じました。

また、多くの講演が私にとってとても感慨深いものになりました。避難所生活の中で笑顔がなによりも励みになったこと、人とのつながりが命を救うこと、支援する側も相手の状況を考えることなど、自分たちの行動でどれだけの人の命綱になるのか、また、困らせることになるのか、とても考えさせられました。今回学んだ多くのことを周りの人達に伝えていくのはもちろんのこと、防災を学んだ私たちにしかできないことがこれから少なくとも出てくると思います。そんな私たちがどれだけの人を助けることができるかを日々留意していこうと思います。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　**渡邊 真凜**

「防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

今回、防災合宿に参加して、自分自身の防災意識を見直すことができました。

まず、私を含め、周りの人の防災意識が低いことを強く感じ、４日間を通して防災意識を考え直すことができ良かったです。他校の防災関係の活動は私の高校では行われていないものばかりで、同じ高校生でも学校によって取り組みや観点が様々で、私の学校でも独自の取り組みが行えるといいなと思いました。また、熊本地震経験者とは言えないくらい災害に対する知識がなかったため、地震の仕組み等から災害との向き合い方までを学び、その後のWSを通して防災意識を高めていく初めの段階を踏めたのではないかと思います。

４日間を通して、地元で災害が起こった時にマニュアルにはなくても高校生でもたくさんできることがあり、私達の行動が周りの人の行動面や心理面に与えられることを聞くことができました。合宿で得た知識を活かして、周りの人と一緒に防災意識を高めていきたいと思います。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　稲留 慎之佑

「防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

今回、防災ジュニアリーダー合宿に参加して、私は、災害の恐ろしさと、防災の大切さを改めて知ることができました。私は、中学校２年生の時に熊本地震を体験しました。当時は、熊本で大きな地震が起きる可能性は非常に低いと言われており、私たちも、まさか自分が大災害に見舞われるとは思っていませんでした。今回の防災合宿では、地震や津波が起きた時に、自分に何ができるのかについて考える機会がありましたが、私は、地震が起きたときの避難所の運営についての講話が一番心に残りました。グループ内で話し合いをし、避難所ではどのような役割分担をすべきなのかについて考え、紙にまとめましたが、案外足りていないところがあり、これを災害時の混乱の中決めるのは難しいと思いました。これから、災害が起きたときに、率先して行動し、皆をまとめられるようなリーダーになりたいです。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　長濱 勇気

「防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して」

私は今回全国防災ジュニアリーダー育成合宿in阿蘇に主管校として参加しました。そして各分野の先生方のご講演を聞く中で特に齋藤幸男先生のおっしゃった「正解ではなく成解を求める」という言葉が印象に残りました。先生が経験された避難所での体験でも、子供が率先して掃除した事によって解決したトイレ問題や第一に行った駐車場整備など必ずしも決まった事のみをするのではなく臨機応変な対応を動ける人全員、一人一人が考え行動する事でその避難所にいる人皆が納得する「成解」を導く事が出来たと伺いました。緊急時こそ受動的になるのではなく、能動的に動いていこうと思います。また先生は「笑顔」が最も大切だともおっしゃっていました。「辛くても無理やり笑え」私はこの言葉には実際の悲しくてどんよりとした雰囲気の中で笑顔により希望を作った方々からの教訓が込められていてとても心強い言葉だと思いました。災害での被害は起こらないと分かりません。しかし事前に予測して減災する事は出来ます。今回の合宿で学んだ予防、応急対応、復旧を心に留め被害を防ぐためもし被災したらその場の全員で考え笑顔を絶やさずに対応していこうと思います。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　江口　優

「防災ジュニアリーダー育成合宿に参加して学んだこと」

今回防災ジュニアリーダー合宿に参加して、学んだことや得たものがとても多く貴重な体験ができたと思ったのと同時に、得たものが多ければ多いほど自分は防災について何も分かっていなかったのだと痛感しました。研修を通して得たものとして、私だからこそできるかもしれないと思ったことがSDGsについてです。実は私は熊本地震を通して水の大切さを改めて痛感し、その思いから少年少女国連大使として国連本部へ研修に行ったことがあります。その時はSDGsの目標についての考えを国連本部や日本で発表し、水の大切さや自分たちにできることを発信し続けていました。その経験は今回の合宿とも大きく関係するのではないかと思います。だからこそ私が知っているSDGsの知識と絡め、防災対策についてできるだけ多くの人へ伝えていく事が私の使命だと思っています。今回の研修でこのことに気づけたことは自分にとって大きな変化で、参加できて本当に良かったです。

熊本県立
熊本第二高等学校
２年　大見 歩美香

「防災ジュニアリーダー育成合宿で学んだこと」

防災ジュニアリーダー研修では、地震の仕組みから地震が起きた際の対処の方法、アフターケアーまで幅広く知ることができました。そして講話やワークショップを聴いて一番大切なのは、知った知識を知って終わらせるのではなく防災や地震の際に生かすことだと思いました。具体例としては私が大学生になったら安いアパートを探すのではなく、ハザードマップを確認して安全な場所を探し少し高いアパートを選ぶことや、緊急時持ち出し袋は一人一つ、自分の分は自分で用意することです。この他にも沢山防災などについて教えていただいたのでそれらを一つ一つ実践していきたいと思います。更に被災地を実際に見て回ったことでより一層防災をしようと思いました。

熊本県立
熊本第二高等学校
2年　島田 さくら

「防災ジュニアリーダー育成合宿で知ったこと、考えたこと」

今回の防災ジュニアリーダー合宿では、様々な観点から防災を知る、または考えることができました。熊本地震の中で今まで画像や話でしか知らなかったことも、実際にフィールドワークに出向き、断層や被災地域を見て、初めて知った、気づいたことが多くありました。講演会では地学的な視点からの防災講演や、社会的な視点からの防災と、様々な観点からの防災があることを知りました。ポスターセッションでも、他の学校の発表を聞いて、自分達の学校、また地域での防災・減災に参考にすべきことに気づいたことが多くありました。今回の合宿で得た経験や知識を身につけただけでは終わらせず、これからの人生で積極的に防災・減災に使い、広めていきたいと思います。

令和元年度　全国中学生・高校生防災会議
「全国防災ジュニアリーダー育成合宿 熊本」参加生徒一覧

学校名	氏名	学年
宮城県多賀城高等学校	本間　優輔	1
	櫻井　乃綾	1
兵庫県立舞子高等学校	三好　彩香	1
	松原　陽向	2
	青木　翔佑	2
	大澤　太希	2
兵庫県立松陽高等学校	阿野　伊小里	1
	加藤　優音	1
神戸市立神港橘高等学校	小宮　丈昇	2
京都府立東稜高等学校	江口　竜ノ介	2
	片岡　奨	2
岡山県立真庭高等学校	本多　礼緒奈	2
	鷲須　友樹	2
高知県立須崎総合高等学校	中川　海咲	2
	福井　緋奈乃	2
高知県立大方高等学校	宮川　翔	1
	田辺　真喜	1
大分県立佐伯鶴城高等学校	山内　日和	1
	山田　夏音	1
宮崎県立福島高等学校	谷口　美羽	2
	池島　優香	2
熊本県立東稜高等学校	日高　祐貴	2
	亀井　風花	2
熊本県立熊本工業高等学校	竹原　ひまり	3
	大坂　蒼一郎	3

学校名	氏名	学年
熊本県立菊池農業高等学校	田中　美咲	2
	藤原　彩楽	2
熊本県立阿蘇中央高等学校	宮内　蒼馬	2
熊本県立高森高等学校	小屋迫　結	2
益城町立木山中学校	服部　孔星	2
	増永　和華	2
熊本市立東野中学校	阪野　雛	2
	倉留　羽花菜	2
	吉住　一	2
南阿蘇村立南阿蘇中学校	田尻　菜々美	3
	深澤　寿来	3
阿蘇市立一の宮中学校	河本　長秀	2
	吉岡　直輝	2
熊本県立熊本第二高等学校	江上　諒	2
	髙瀬　裕展	2
	金井　俊樹	2
	堀尾　優太郎	2
	河原　希歩	2
	渡邊　真凜	2
	稲留　慎之佑	2
	長濵　勇気	2
	江口　優	2
	大塚　ひかり	2
	大見　歩美香	2
	島田　さくら	2

計　20校　50名

おわりに

国立花山青少年自然の家を中心として実施された「全国中学生・高校生防災会議～全国防災ジュニアリーダー育成合宿　東北～」から、はや７ヶ月が過ぎようとしています。全国から志ある高校生・中学生の皆さんが集い、意見を交わし、ともに行動することを通じて互いの見識を深める機会を得たことは参加生徒諸君にとって誠に有意義であったと感じます。

別項に記載されているように、津波被災地域のまち歩きや様々なワークショップ、さらには沢活動や栗駒山麓ジオパーク見学を通じ、自然環境や災害に対する理解を深め、防災・減災に関する知識を深化させ、実践的な学びが体験できたのではないかと思います。日本各地の生徒諸君がともに考え、会話することで、異なる文化や考え方への理解を共有する貴重な三日間になったことと思います。

この後、参加者各自が合宿での経験を生かし、各地区で防災・減災のリーダーとしてさらに資質を向上させていることと推察します。

当合宿の目的に『…災害が頻発している我が国における…次代を担う人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上…』とありますが、昨年10月に台風19号が日本各地に甚大な被害をもたらしたことは記憶に新しいところです。この台風によって災害救助法の適用を受けた市町村数は東日本大震災を上回ったとのことです。私共の高校でも被災地域の復旧ボランティアに参加しましたが、水の力の恐ろしさ、そして日本中どこであっても自然災害を被る危険性をあらためて感じた次第です。また、当合宿のような取組の大切さ、防災リーダーが求められていることを実感いたします。この紙面を借りて被災した皆様方にお見舞い申し上げ、一日でも早い復旧をお祈り申し上げます。

最後になりましたが今回、ご尽力・ご協力いただいた多くの皆様方、生徒の皆さんに深く感謝申し上げ、挨拶といたします。

令和２年３月
宮城県多賀城高等学校長　牛来　生人

2016年に発生した熊本地震から間もなく４年が経ちます。熊本の今は、復旧・復興に向けて道半ばの状況にあり、県内外を問わず様々な「人」の力を集結し創造的復興を成し遂げようとしています。このような場所で令和元年度の全国防災ジュニアリーダー育成合宿（西日本）を開催でき、中・高校生のみなさんが災害・防災・減災に対して、真正面から向き合ったことは大変有意義なことだったと思います。未だ震災の爪跡が残ったままの被災地を見学したこと、被災者の方々から直接当時の状況を伺ったこと、講師の先生方から自然科学的な側面や社会科学的な側面から講演を頂いたことは、みなさんの心に強く刻まれ、各学校に戻った後の活動につながっているのではないでしょうか。

今回の合宿では、災害を「自分事」として捉え、今後災害が起こった際に、自分には何ができるのか、何をしたいのか、そのためには今何をするべきなのかについて熟考してもらうとともに、最後にはアウトプットをしてもらいました。そこでみなさんは、自分が将来どのような職業や立場に就いていたとしても、できることが必ずあるということに気付くことができたと思います。

『悲しいときでも笑顔を絶やさないで、防災・減災活動に取り組んでいきたいと思います。』『得た知識を改めて自分で考え直して、自分が行動することの大切さを学びました。』これらは、参加した生徒の言葉です。この言葉こそが、今回の合宿の成功を物語っていると思います。これから、みなさんは地域の防災リーダーとして、活躍することが求められます。そのためには、今の想いを決して忘れず、持続可能な取り組みを行っていくことが大切です。みなさんの手によって安全・安心な社会が作られることを願っております。

最後に、独立行政法人国立青少年教育振興機構、国立阿蘇青少年交流の家、参加校の関係者ならびに御講演・御講話を頂きました講師の先生方の方々に深く感謝申し上げ、挨拶といたします。

令和２年３月
熊本県立第二高等学校長　　山本　朝昭

令和元年度　全国中学生・高校生防災会議
「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」記録集

発行　国立青少年教育振興機構　教育事業部　事業課
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園長3-1
電話番号　０３－６４０７－７２０１（代表）

令和２年３月発行

主　　催　　独立行政法人国立青少年教育振興機構
特別協力　　公 益 財 団 法 人 上 廣 倫 理 財 団